
生徒会へ集合っ！

リレー小説家

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生徒会へ集合っ！

【Nコード】

N6078I

【作者名】

リレー小説家

【あらすじ】

私立桜町第一高校生徒会は、史上最も生徒の支持を受け、且つ史上最も先生の仕事を増やした生徒会。会長を筆頭に生徒会メンバーは全員超個性的な面々で・・・！？ この小説は、『Mr. あいう』『十六夜神月』『時計堂』『椎名瑞夏』『汐嵐』『無限の闇』『お茶』といった作者陣が合同でひとつの小説を書こう！といったコンセプトのもとに、それぞれ各人が考えた登場人物の一人称で書かれたリレー小説です。

なお、どの作者が書いた作品かというのはそれぞれのエピソードの前書きに記載されています。

&l t・会長視点& g t；

私立桜町第一高校（前書き）

どうも、一番打者のM r・あいうです。

先頭なんて大役を任されてしまったわけですが、なるべく面白く！
且つ次の作者様に負担の無いような終わり方をしよう！と責任感に
震え上がりながらの作品ですが、楽しんでいただけたら幸いです。

5月。

まるで五月晴れという言葉を体現しているかのような空の下。

私立桜町第一高校の生徒たちは一日のカリキュラムを終え、生き生きとした表情で各々自分の居場所へ散っていく。

桜町で一番目に作られた高校だから桜町第一。

そんな小学生並みのネーミングセンスを持つ校長の独断により名づけられたこの高校は、今日も今日とて平和に平穏。

少なくとも、そこにいる人々の常識からいえば、の話だったが・・・

ある者は運動場で自身の部活に精を出し、

ある者は気の知れた友達とともに家路に着き、

ある者はタイムマシン開発といったばかげているとも取れる研究に時間を費やし、

ある者はひたすらに己の筋肉を磨き、

ある者はただボーっとしていて、

ある者はただ好奇心から人間を観察していた。

そんな中、その人々の中でも最も生き生きとした人物が、嬉々とした表情で生徒会室のドアを蹴破った。

本来、横開きのはずのドアを、である。

木材が軋み歪んで押し折れるときの破壊音とともに現れたのは眼鏡の美少女。

ゆったりと伸びた黒髪を後ろで一くくりにまとめたその美少女は、女装が似合う男子といったほうが納得できるような凹凸を主張しないボディラインをしており、セーラー服さえ着ていなかったら女子が放っておかないような整った顔立ちをしている。

身長170センチほどの体はマネキンのように華奢で、その足は先の破壊力抜群の蹴りを放ったとは到底考えられない脚線美は相当鍛えているようだ。

両手いっぱい書類を抱えたその少女は、片足を上げたまま、扉に対して特に何の感慨も見せずにこう言い放つ。

「よし！生徒会としての最初の仕事は、この学校のドア全部を頑丈な自動ドアにすることだね！」

億単位の学校の予算がただ両手がふさがった人の為に使われようとしていた。

しかし、その顔は全く冗談を言っているような風には見えず、ただ純粹に学校をよくしようという信念のみがつかがえる。

これが、彼女の一番の良いところであり、同時に悪いところでもあるのだが。

その少女は一番奥にある最も日当たりのよい机の上にドサリと両手いっぱい書類を置いて、

「私立桜町第一高校一年二組。釘宮 蓮くきみや はす！生徒会長としてこれから一年頑張るぞ〜！」

誰もいない空間に所信表明をした彼女は、五月の日光を体いっぱいに浴びながら、幸せそうに伸びをする。

この少女が、この学校史上最も先生方に迷惑がられている桜町第一高校生徒会の生徒会長 釘宮 蓮。
一年生ながら先生方に全く配慮していないマニフェストを生徒に勝手に提示し、圧倒的支持を得て当選し、しかもそれを真面目に遂行しようとしている超問題児だ。

しかしそんなことよりさらに問題なのが、この釘宮 蓮が『最後の義賊』と呼ばれ、世間を騒がす大泥棒 釘宮 斜平くきみや しゃへえの娘で、しかもその影響を多分に受けているということだった。

それさえ知っていればこの高校も少しは対策を取れたかもしれないが、

後にこの生徒会が『ピース・クラッカー 平穩崩し』の異名を持って職員室を戦々恐々とさせたのは、少し後の話。

「さて！目下の仕事は部費の割り振りだね」

といいながら山と積まれた書類を前に私は自分に呟く。

正直言つてこんな面倒な仕事は会計兼幼馴染の涼太に任せて、さつさと私は体育祭を年2回、図書室に漫画を置く、などといった先生が苦笑するようなマニフェストの実現に動きたいのだが、まだメンバーの誰も来ていないこの生徒会室に一番乗りしたのには理由がある。

「スタント部、スタント部……っとなつた」

目的の部活の書類を見つけると、私は急いで書類作成に励んだ。

スタント部とはその名の通りスタントに全力を注いでいる部活なのだが、そんな危険いっぱいの部活、部費が多く入るはずもなく、スタントはいつも地味なものばかりだというのだ。

そこで、私が秘密裏にその部長と交渉し、部費を大量に流す代わりに火薬を少し分けて欲しいと頼んだのだった。
いわば職権乱用だが、火薬の魅力には勝てなかった。

（閃光玉に手榴弾に自家製花火、ウフフフフフ……）

元来派手なものが大好きな私は、爆発というものに目が無かった。それに加えて父親の釘宮 斜平に爆弾作りを教えてもらっていたために、爆弾作りは幼いころからちよつとした私の趣味だった。

しかし父親が全国的に指名手配されてからは火薬があまり手に入らなくなったうえ、ちよくちよく警察の人がうちに来るようになったために最近ではあまりやらなくなっていたのだが、この学校で作るならばれる事も無いだろう。

それに……

「キレイな花火を見たら、皆も少しは幸せになってくれるだろうしね♪」

と、そんな歪な価値観で他者の幸せを願う生徒会長が幸せそうに二
やついている生徒会室の前に、一人の男子生徒がたたずんでいた。
その男子生徒の足元にはついさっきまでその教室の扉であったであ
ろう木片。

それを黙って見つめる彼こそが、桜町第一高校生徒会副会長真崎
蒼空^{そら}

彼はその残骸を踏み越えて、ただ無言で生徒会室に入っていく。

そんな彼の心境は、その張り付いた微笑からは窺い知ることとは出来
なかった・・・

&l t・会長視点&g t；

私立桜町第一高校（後書き）

次の作者様は十六夜神月さん。
よろしくお願いします。

& l t ; 副会長視点 & g t ; 私立桜町第一高校その2（前書き）

どうも、2番バッターに選ばれた十六夜神月です。

果たして僕を知っている人はいるのでしょうか…

Mr・あいう先生のパスを出来るだけ生かせるように頑張りましたが、

結局はミスった感が否めません。

しかも、次の人にキラーパスしてしまったぽいし。

まあ、1人でも多くの方に楽しんでいただければ、

これほど嬉しいことは有りません。

それでは、文才皆無の僕が書いた回、見捨てずにお楽しみください。

<副会長視点> 私立桜町第一高校その2

「これは、一体どう言う事でしょうか？」

良く通る凜とした美声に、生徒会長、釘宮蓮が視線を上げる。

その視線の先に佇んでいたのは、微笑を浮かべた一人の男子生徒。

180cmほどの高身長に、スラリとバランスの取れた華奢な体。

扉が無いせいで入ってくる微風によって靡く、ブラウンの髪。

内心を読めない微笑に、さらに拍車をかける涼しげなブラウンの瞳。

「む、気配を消して近づくのは感心しないよ、真崎副会長」

そう、この美少年こそが、桜町第一高校の副会長、『真崎蒼空』である。

「気配を消したいお年頃なのですよ」

「どんなお年頃よ」

「ですから、こんなお年頃です」

そう言って、自分を指差す蒼空。

それを見て、一瞬呆れた顔になった蓮だが、

すぐに呆れ顔を消すと、最初の蒼空の問いにちゃんと答える。

「最初の質問の答えだけど、書類の束を抱えてて、

手が塞がってたの。それで、扉を開けられなかったから蹴破った」

全く悪びれる様子も無く言う蓮。

それを見て、蒼空は数秒黙考した後、

「とりあえず、学校の扉を全て自動ドアにすべきですね」

蓮と思考回路は大して変わらなかった。

「あ、それ私も思った」

それに対し、蓮が可笑しそうにしながら答える。

「ふむ。まあ、それはさて置いて。お久しぶりですね、釘宮蓮」

蒼空の表情が相変わらずの微笑ながら、少々真剣味を帯びる。

それに対し、蓮も少しだけ真剣な顔になり返す。

「そうだね、何年ぶりだろう？」

「何年振りでしょうか？」

そう、この2人、過去にあったことがあるのだ。

蒼空から見れば、蓮がかなり恩人になるような形で。

まあ、それには蒼空の過去が色々と関係してくるのだが、

蒼空は過去を知られることを極端に嫌うため、

蓮を含め、極少数の人間しか蒼空の過去は知らない。

今は、聞いて楽しいような内容では無いとだけ言っておこう。

「うーん、まあ、もう過ぎたことだし」

「そうですね、もう過ぎたことです。なので今日からは、

私立桜町第一高校2年2組。真崎蒼空^{マサキアヲ}、生徒会副会長として、

これから1年、よろしくお願いします。」

その言葉と共に、右手を蓮に向けて差し出す蒼空。

「うん、よろしくだね！副会長！！」

それに対して、満面の笑みで左手を差し出す蓮。

2人の手が、暖かな日の光の中重なった。

「さてと」

この『ドア木端微塵事件（命名僕）』の真相も分かったことですし、久しぶりの再会も果たせましたし。

本格的に学校中のドアを全て自動ドアにする準備を、
ん？

「会長、何をニヤニヤしているんでしょうか？」

「え？」

僕がそう問いかけると、何故か少々挙動不審になる。

普通は気にも留めないような些細な変化だが、確実に挙動不審である。

「なにになに？スタント部部費明細、ですか」

「あ」

会長がニヤケながら見ていた書類を盗み見る。

「確か、スタント部は毎回、部費が結構少なかった筈では？」

それが何故、そんなに多額になっているのでしょうか？」

僕がそう言つと、会長の挙動不審ぶりにさらに拍車がかかる。

「えつとね、…そう！スタント部なのに、

地味なスタントばかりじゃダメだと思つて——」

「なるほど、火薬の取引ですか」

「ばれてる！？」

「花火を見れば皆どうか聞こえてましたからね」

「あー、えつと」

「ならば、さつさとやらないと、他の役員も来てしまいますよ？」

「だって、花火を見れば皆——え？」

「いえ、ですから、さつさと終わらせないと他の役員も来ますよ？」

「そうなんだけど、止めたりとかしないの？」

「何故です？副会長の仕事は主に、会長の補佐や会長の間違いの修正です。」

しかし僕は、間違いの修正をする気はありません。

まあ、明らかに間違いだと思った場合はちゃんと修正するつもりですが、

その部費の割り振りは、我が生徒会に任された仕事。

そしてこの生徒会の長は会長、あなたです。

全校生徒から選ばれた、貴方なら任せられるという人が会長です。

会長が正しいと言えば、間違いではなく正しいのです。

僕は生徒会副会長、あくまで会長の補佐として判断した結果です。

少々私利私欲が混ざってる気がしないでもないですが、

まあ、許される範囲でしょうし、

なにより、スタント部はスタントする部ですからね」

僕が長い話をなんとか話しきると、会長が目を輝かせ

「だよね！ー！よし！それなら決定だね！ー」

そう言って、再びペンを走らせ始める。

釘宮蓮、色々と考えが常人離れている所があるが、

根は物凄くいい人である。

僕も昔恩があることだし、できるだけ力になろう。

それにしても、全く無駄の無い、綺麗なペンの動きである。

そんな変な所で感心していると、会長の手が止まる。

「あー」

そして、少々残念そうな声を上げる。

恐らく、会長も気付いたのだろう、この生徒会室に接近する新たな気配に。

そして、蓮と蒼空の感覚を裏付けるように、

靴音が、確実に生徒会室に接近してくる。

残念そうにしながらも、新たな仲間を、顔に笑みを浮かべ待つ蓮。

相変わらず内心がほとんど読めないながらも、いつもより幾分か深い微笑を浮かべる蒼空。

そしていよいよ、3人目の個性的メンバーが、生徒会室に姿を現す。

<・副会長視点>・ 私立桜町第一高校その2（後書き）

次の作者様は時計堂さんです。

キラーパスですね。

後で謝罪しておきます。

それでは、よろしく願います。

こんな感じをお願いします！！

< 鈴木書記視点 > 私立桜町第一高校その3（前書き）

三番バッター、時計堂はいります！

だいぶ長文・乱文になってます……だって意外と楽しいんだもの。
勝手に海沿いの高校にしちゃいました。自分でも身勝手だと反省
しております。

でも夏とか海で活動させたいんだ！

< 鈴木書記視点 > 私立桜町第一高校その3

初夏というには早く、春というには木々が青々としすぎている五月晴れの空の下。クリーム色の校舎に一羽の海鳥が真白な羽を散らしながら、羽音を立てて舞い降りた。

海沿いの港町にある、私立桜町第一高校。その規模の大きさと、行事の盛大さでそれなりに名のある進学校である。それに上乘せして景色の良さや、ほどよく風に乗ってくる潮の香りなどもあって人気の高校だ。

その高校の、とある片隅の廊下。まだ昼間の余韻が漂ってはいるが、人気はなくなりつつある。学校という社会の空気から姿を消し、残るのはグラウンドで走り回る運動部の生徒のみ。

廊下にキュッキュというゴムの音を響かせながら、一人の少年が歩いていった。大きくもなければ小さくもない身長に、痩せても太ってもいない体形。世に言う、中肉中背。墨汁を垂らしたかのような艶のない髪と、その隙間からのぞく黒い目。特徴を上げるとしたら、その目つきがやや鋭いということぐらいか。十人並みの、ごくごく平凡な少年。

後々オレンジ色に染まるであろう光と影をまたぎつつ、彼はため息をついた。

あのとき、グー出さなければよかった。

いや、そもそもクラス委員がクラスで一人くらいは生徒会役員を出そうと言い出したからいけないのだ。字がきれいだからという理由で選ばれ、高校生になってまで真剣にじゃんけんをやらされるとは思わなかった。しかも負けるだなんて。

緩やかな潮風が窓から入り込み、額にかかる短い髪を揺らす。放課後の廊下には、帰り支度をする生徒たちとたびたびすれ違ふのみ。

それすらも、だんだんと数を減らしつつある廊下に靴が立てる足音が反響し、否応なく生徒会室に近付いていることを知らされる。頭を書いて、思わず嘆息した。

平凡な高校生たるもの、生徒会などに参加してはいけないものなのだが……。

窓の外を見ると、すがすがしい青空と艶やかな緑色の木々が広がっている。こんな日にバイクで走ったら気持ちがいいものだろうな。ゆったりと流れる雲に心をはせていると、何かがぶっ飛ぶ破壊音が鼓膜に響いたが、さして気にすることでもない。

まあ、生徒会なんてどこの高校でもだべってるだけだよなあ。生徒会役員に、そんな奇異な人材なんて集まらないだろうし。

そう思いなおすとまるでそれが揺るぎない真実のように思えて、足取りが軽くなる。一昔前のロックを口ずさみながら、誰もいない廊下を駆け足気味に歩き出した。

思惑、打ち砕かれたり。

「こんにち……って、ぎゃあああああああ！」

生徒会室に近付いてまず視界に入ったのは、廊下の藻屑と化した扉。まあなんと大胆にと称賛を贈っている場合でもなく、何事かと思つて木片を飛び越え、あわてて中に飛び込んだ。

「ん、今は騒ぎ立てるとまずい状況なんだよね」

正面の机に、青空をバックに腰掛ける少女が楽しそうに口を開く。眼鏡をかけた、ひとくくりの黒髪のとつややかさが印象に残る少女。レンズの奥からは夏瞳の輝きと言い、その整った顔立ちと言い、中性的、つまりは誰もが惹かれるような顔立ちをしている。しかし表情は対照的に子供っぽく、アンバランスな魅力を醸し出していた。

「会長、これが一般の反応ですよ」

「なんでそこは平然としてるんだ！」

あと一般人認定ありがとう！

少女が座っているデスクに寄りかかった、ブラウンの髪と瞳の少年。高身長、それに伴ってすらりと伸びた華奢な手足と整った顔立ち、どこかのアイドルかと錯覚してしまうほど。……まとめて言う、美少年。

「……聞きますけど、どうして、扉が、木片になってるんですか！」
一言一言をくぎつて、わかりやすく訊いてあげた。それに対する少女の返答は、理解に苦しむものだった。

「学校のドアが自動じゃないから」

「わけわかんねーよ！ 教室の扉が自動ドアって、ここはスーパーか！ 大型店か！」

ここまで来て、遅すぎるにしても自分の状況を一瞬にして悟った明晰さを褒めてほしい。……ここは、平凡な高校生がいるべき場所ではない！

「すみません。辞退させてください」

角度90度のお辞儀を披露し、一步後退。そんな提案は、聞き心地の良い凜とした声に一蹴された。

「それこそ無理な話だよ、鈴木太郎書記」

少女が口にした名前に、思わず目を見開く。……言うまでもなく、自分の名前だ。正面で頬杖をつき、こちらに微笑みかけてくる少女をまじまじと見つめる。先ほど、隣の美少年は彼女のことを会長と呼んでいた。ということは、このたび生徒会長に就任した釘宮蓮とみて間違いなからう。

1年にして異例の支持を獲得し、2年を跳ねのけて見事生徒会長に座に収まった少女、釘宮蓮。顔こそ見たことなかったが、噂だけは生徒たちのあいだを音速で飛び交っていたから知っている。……一応、自己紹介はしておいた方がいいんだよな。

「はじめまして。書記の鈴木太郎です」

「会長は1年で、僕は2年何だから敬語は結構ですよ」
そう言う自分が敬語なのはどうかと思うが、あえて突っ込まないことにした。頷きながらも、頭をかく。なかなか規模が大きい学

校なので知らない生徒は多数いるが、この人とはすれ違ったことすらない。

「えーっと、そっちは……」

「ああ、僕は真崎蒼空。役職は副会長です」

そう言って美少年——真崎は右手を差し出してきた。……おお。握手なんてアメリカンなあいさつを求められたことはなかったので、フリーズしちゃったよ。おずおずと差し出すと、ほのかに暖かい手をしっかりと握った。俺の手とは対照的に、白くてつるつるの肌だなあ……と、手の傷に感づかれる前に引っ込めようとしたが、がちりとかまれていては離せない。彼はブラウンの瞳を細めて、俺の手を眺めた。

「随分と、怪我をしてらっしやったみたいですね」

「う、ん。まあね」

曖昧に笑ってごまかし、緩んだ手の隙間から抜け出す。内心では、ほっと息をついた。

大丈夫、あの時代の俺を知っている人間はいない。

気を紛らわせるように、会長の方を振り向いて素朴な疑問をぶつける。会長は、なにやら書類と必死に格闘していた。

「それにしても会長、なんでまた俺の名前を？」

「全校生徒の顔と名前ぐらい、覚えていて当然でしょ」

「……………」

絶句。この人がぶっ飛んでいるのは、見た目や行動だけではないらしい。

3年間、厄介な生活を送ってきました。

1年間、穏やかな日々を過ごしました。

あと2年、俺は、平凡に過ごせますか？

とんでもない厄介事を抱えてしまったと頭をかくと、ふと耳に入ってくるのは誰かの足音。ゆっくりと、入口の方に振り向く。

「来たね」

「来ましたね」

「……………」

ああ、イエスよ仏よマリア様よ。

次の被害者に、救済を。

いや、と考え直す。

ひよっとしたら、俺が一番の被害者では——？

人影が、入口から顔を出した。

< 鈴木書記視点 > 私立桜町第一高校その3（後書き）

なんだか、槍のように鋭いキラーパスのような。

次は椎名瑞夏さんですね。……とりあえず、ごめんなさい。

あと面倒をかけてしまっているMr. あいうさんに感謝の気持ち
をこめて。

次回、楽しみにしております！

<楠木書記視点> 私立桜町第一高校その4（前書き）

四番、椎名瑞夏です。

かなり文が支離滅裂ですが、どうかお付き合いください。
それでも、精一杯頑張りました！

<楠木書記視点> 私立桜町第一高校その4

「・・・」

見事なまでに蹴破られたドアを見つめる少女。

その整った眉が、一瞬だけ訝しげに顰められる。

しかし、心に浮かんだ疑問を深く追求することを諦めたのか、彼女は地面に伏したドアを何の躊躇いもなく足蹴にした。めきり。

ガラスが異様な音を立てたが、それも気にしない。

何故ならば、彼女は現在猛烈に機嫌が悪いのである。

原因はー・・・。

(あんのくそ兄が・・・っ)

黒檀のような艶めいた黒髪を、緩く二つに束ねているのは真紅のりボン。

大きな瞳は、日本人には珍しく澄んだ茶色に染まっている。

華奢な身体を持つ彼女は、そう。

万人の認めるであろう、超のつく美少女だった。

そんな少女が纏っているのは、勿論ここ桜町第一高校の伝統あるセーラー服。

・・・ではない。

黒を基調に、ところどころ赤の装飾が施されたそれは、いわゆる改造制服というもので。

さらに改造された制服は、その特徴的な造りと華美な飾りのせいで、ちよっと危ない趣味をしたオヤジが泣いて喜びそうなゴスロリとなっていた。

おまけに。

彼女によく似合っている。

「失礼。書記の二年三組、楠木都古よ」

自己紹介をさらりとこなすと、少女こと都古は肩に掛かった髪を払いのけた。

その仕草と声につられて、一足先に部屋にいた生徒会の面々が顔を上げる。

そして、表情を曖昧に困惑させた。

まあ、理由は言うまでも無いが……。

「私は会長の釘宮蓮くぎみやはすだよ。よろしく」

スラリとした体型の美少女が、そう言って薄く笑う。

これが、噂の一年会長か。

上から下まで満遍なく目を通すと、都古は心の中で頷いた。

なるほど、美人だ。

マニフェストが大半の生徒の心を掴んだと聞いたが、これは容姿で投票した男子生徒も少なくはないだろう。

納得する都古。

ちなみに彼女は本意ながら、一部の男子生徒の支持を圧倒的に受けている。

「僕は副会長の真崎蒼空まざきそうです。初めまして」

これもなかなか綺麗な顔じゃないの。

顔だけなら兄に負けないわね。

握手を求め伸びてきた手を払いのけながら、都古は憎い兄の顔を思い浮かべる。

無意識に、額に青筋が浮いた。

「俺は、書記の鈴木太郎すずきたろう。よろ……しく」
普通。

彼女の頭に鈴木は普通とインプットされた。

「ところで、楠木書記。その格好は一体？」

一通り紹介が終わったところで、蓮会長が咳払いをして、全員の疑問を口にした。

蓮はひらひらのレース付きスカートを指差す。

残る二人の視線も、都古の制服に向けられている。

「兄の嫌がらせ。・・・あ、ドア壊れてるわね」

単純明快に答えると、都古はあっさりと話題を摩り替えようとした。
「それは私が蹴破った。手が塞がっていたからね。それより、嫌がらせというのは・・・？」

無論、こんな面白そうな匂いのする話題を蓮がおめおめと見送るはずもなく、話は戻された。

「説明、すべき？」

「はい。かなり気になるところですからね」

あからさまに迷惑の表情をした都古だが、そんな逃げの通用する空間ではない。

それを知ってか知らぬか、都古はため息をつくと、潔く重い口を開いた。

〈回想〉

軽快な目覚ましのベル音に、都古はまぶたを持ち上げた。

典型的な低血圧である都古は、いらいらと髪を掻きながらベッドから這い出る。

今日は先日 of 生徒会選挙で当選した、生徒会メンバーとの顔合わせの日だ。

面倒くさいが、サボるわけにはいかないだろう。

「ふわあつ。着替えるかな」

盛大に欠伸をし、都古は昨晚椅子に引つ掛けたはずのセーラー服に手を伸ばした。

「・・・何、これ」

疑問符さえ付けず、都古は手に引つかかったモノを目の前に掲げた。
黒い生地に、赤のリボン。

レースにフリルは、これでもかという程ごつてりと。
それはまさしく・・・ゴスロリ。

「なんで、ここにこんな服があるの？」

あたしにそんな趣味はないはず・・・と朝なのでイマイチ思考が上手く巡らない都古は考え込む。

その時、ひらりと服から紙切れが舞い落ちた。

『拝啓 愛しいマイスイートシスターへ』

お早う。今日は生徒会の初顔合わせと聞いたよ。僕も経験したから分かるけど、第一印象はこの上なく大切だからね。都古の愛らしさを存分にメンバーの脳裏に焼き付けてやるんだ！そのための協力なら、僕は惜しまないよ。まず手始めに、君の制服を改造しておいた。お寝坊な都古のことだから、今朝も登校ぎりぎりに起きたんだろう？それじゃあ、もう制服を元に戻すのは間に合わないね。諦めてそのゴシックなロリロリ服を着ることだ！そして、兄さんに写真を送っておくれ！！

ニューヨークの空に下にいるブラザーより』

しーん。

まさに、あたしの話が終わった部屋はこんな空気だった。なんと返事をすべきなのだろうか。

そんな思いが、各々の頭によぎっているのが目に見える。

「あの馬鹿兄の言うとおり、戻す時間なんか到底無かったから、このまま来たってわけ。本当、はた迷惑な兄よね。ま、父様が学校に10億位寄付してるから、先生は誰もあたしのこと注意なんて出来ないしね」

吐き捨てるように、忌々しげに呟く。

「・・・・・・・・」

更に、空気が濁っていつてる気がする。

あたしの天敵である実の兄、楠木秀一。くすのきしゅういち

眉目秀麗。

頭脳明晰。

運動神経抜群。

おまけに明朗快活。

あいつは、彼を憎んでも憎みきれないほど憎んでるあたしから見て
も、非の打ち所の無い完璧な奴だ。

そんな兄なので、勿論高校在籍時は生徒会に属していた。
それも、会長として。

本来ならそんな雑用係みたいな生徒会なんて、まっぴらごめんなあ
たしが、選挙に出た訳。

兄に負けたくないから。

きゅつと唇を噛み締めて、あたしは拳を握った。

もつと頑張らなくちゃ。

兄を抜かなきゃいけない。

そうしなきゃ・・・。

父様も母様も、あたしを見てなんかくれない。

もう一度、『都古ちゃん』。

そう呼んで欲しいのなら、あたしは・・・。

「え、え・と。そのピアノもお兄さんからの贈り物？」

空気に耐えかねたのか、鈴木太郎と名乗ったもう一人の書記が尋ね
てきた。

無意識に、あたしは左耳に手をやる。

冷たくて、暖かい感触。

蘇るのは悲しい過去の記憶と、ほんのりと優しい思い出。

珍しく、あたしは自然に微笑えていたと思う。

「ううん、違う。大切な人からの、プレゼント」

壊れたドアの向こうから、新たな足音が響いてくる。

どうやら、最後のメンバーのお出ましのよう。

<楠木書記視点> 私立桜町第一高校その4（後書き）

次の作者様は汐嵐さんです。

すさまじいキラーパス、すみません。

もう、本当にごめんなさい。

あと、Mrあいうさん、面倒おかけしました。

<会計視点> 私立桜町第一高校その5（前書き）

おはこんにちばんは。五番回ってきました汐嵐と申します。

今回は会計視点にお越しくださり誠にありがとうございます。

五番だからまだまだと高見の見物こいてていざ自分の番になった時その悲惨さを身をもって知りました。

あゝあと、先に謝るときです。ごめんなさい。ほんつとにごめんなさい。

誤字・脱字や矛盾している点等は発見しだい報告してくだされば、謝罪の意を示した挙げ句、狂喜乱舞します。かなり喜びます。単純野郎です。

では、生徒会へ集合っ！会計視点。どうぞごゆっくりお楽しみください。

< 会計視点 > ; 私立桜町第一高校その5

同じく桜町第一高校。生徒会メンバーがほとんど集まっているのに対し、一人だけ欠けていた会計の少年が五月の陽気を感じながら廊下を歩いていった。

少年は二人の親友と歩いていた。たまに歩きがてら、冗談交じりの会話をする。ありふれた高校生である。他の者と相違は無い。…ある一点を除いては。

…ふと、少年が立ち止まった。二人の親友も立ち止まる。少年の視線は外に向いていた。二人の親友は初め、疑問符を浮かべながら少年を見ていたが、やがて少年を見ながらクスツと笑った。

そんな親友も気に掛けず、少年は外の景色を見ながらふわりと首をかしげた。その姿は何とも言えない清楚な雰囲気が出ていた。

「…さくらんぼって、桜の実だっけか…？」

そんな天然発言を、もう緑の葉しか付いていない桜の木に向かつてしながら。

少年の名は椿^{つばき} 涼太^{りょうた}と言う。若干（ココ重要。）整った顔に、黒髪、そして何より光の具合では緋色に見える瞳を持っている。

身長170cmの、低くもなく高くもない身長の彼は、制服をすれ違う生徒と同じかそれ以上に着崩して着ている。つまり、普通の男子高校生とあまり変わらない容姿をしていた。

…ただ、一つだけ違うとしたら、その左目の白い眼帯であろう。行く者行く者、全てその異様に白い眼帯を見ては意外そうな顔をした。

「…大丈夫？」

親友の一人、背の小さい少年が、涼太に尋ねた。

「慣れてっから大丈夫だ。気にすんなよ、本間。」

少年——本間は、涼太がそう笑いながら言っていると、そっかと頷く。そんな二人を見ながら、もう一人の親友が呟いた。

「……生徒会ねエ。」

涼太は親友——石毛の方を向く。本間も小さい身長ながらも、

覗き込みながら二人の方を見た。

「何か文句あんのか、馬鹿。」

「……いや、せめて石毛^{バカ}にしてくんない？」

「石毛^{バカ}でいいんだ。」

そう本間が言っていると、石毛は何だかよくわからない抗議を本間に始めた。

今は涼太の生徒会室行きに中学からの腐れ縁・石毛と本間に付き合ってもらっている。この時間は部活をサボっているので、委員会に入らなかつた石毛と本間は暇なのである。

「つーかさ。何で委員会入んなかつたんだよ二人とも？」

「えー……涼ちゃん、だって、めんどくねエ？」

「そーか死ぬ馬鹿^{いしげ}。二度と俺を涼ちゃんと呼ぶな。」

いじけている石毛をほっときながら二人は進む。そして追いてく——！と叫びながら石毛も付いてきた。涼太はこっち来んなと石毛をどやすが、石毛はやダねとふざけて涼太の頭を撫でる。石毛は身長が178cmなため、涼太とは8cmの身長差があるのだ。

そうこうしている間、いつの間にか生徒会室の廊下の角についていた。

「じゃア行つてらっしゃい涼ちゃん」

石毛がむかつくニヤけ顔で手を振って居たため、涼太は眉一つ動かさずに言った。

「後で殺す馬鹿^{いしげ}。」

またもや落ち込む石毛をまた無視し、涼太は踵を返した。

「行つてらっしゃい涼太。」

涼太が廊下の角を曲がろうとした途端、本間がそう言うから振り

返ると石毛も頑張れとでも言いたいのか拳を突き上げている。

涼太はくつりと笑い、拳を突き上げた。

「行つてきます。」

そうして涼太は廊下の角を曲がった。

生徒会の前に立つと、な・ぜ・か、横開きのはずのドアが蹴破られたように横にへし曲がっていた。あつたはずの廊下と教室を区切るドアは無い。

「…何？ドア芋虫化計画でも考え付いたのか、蓮。」

何となく横にへし曲がったドアが芋虫が丸まっている姿に見えたので、奥に居た眼鏡の少女に尋ねた。少女——蓮は、俺の方を見ると一瞬ゲツと言うような表情をし、ガタガタとこつちにくる。

そうか…。犯人はこいつか、畜生。

「来たんだね、涼太！ちなみに私はドア芋虫化計画よりも、全てのドアを自動ドアにするということを考えてるよ！！」

「そらア良いな！俺も横開きは面倒だったんだ。て言うか、まず壊す事はねエだろう。ドア蹴破りたいお年頃か？」

「そのネタはどこぞの副会長が使っちゃったよ。」

「そらア失礼。……して、おめーまさか、スタ部に部費横流ししてねエよなア？」

蓮はギクツと一瞬だけやばいというような表情をした。まア、本当はそんな表情は微塵もしていないが、てか、していないんだろが、長年の苦労の末の結果である。雰囲気^{いしげ}が嘘をついてる時と同じなのだ。

余談だが、スタ部とはスタンド部の事だ。確かあの馬鹿^{いしげ}が遊びがてらに兼部していた気がする。

「……いや、私はこの火薬を使つてだね。学校で花火を……、」

「そんなこつたろうと思つてた。で、何万横流しした？10万は…

いつてるよな。……まさかそれ以上とかは言わない、」

蓮は俺がそう言つと、あはははは、と苦笑いした。…、いや、あははは、じゃねえよ。て言つか、

「おめ、俺があの後力ズにどんだけたらたら説教されたと思ってんだ！！」

俺がそう言つと、蓮は驚いたような困つたような表情で首をかしげた。

ちなみに力ズと言うのは二宮一人、生徒会の顧問教員だ。教師らしくない教師、入学したての俺だつてそう思う。それほどちゃんぽらんな奴なのだが、そいつに怒られるほどの額だつたつてわけだ。「裏取引だからばれてないと思つただけど、」

「ばれてねエ訳ねエだろ！あんな大量な額、横流ししてばれねエと思うか！？」

「いや、口止めたから大丈夫かなつて。」

「いやいやいやいや、無いナイ。それは俺でも、無いとは思つ。」

「まあまあ、会長様の御好意ですのであまり怒らないでやって下さい。」

いや好意だろうな。知ってるさ。知ってるからこそ他の奴が強く言えねエ事を見こして言つてんであつて、……。

心の中でそう考えつつ、ふと違和感を抱き、聞いた事のない美声に振り返る。振り返ると、微笑を浮かべた少年が椅子に座っていた。少年は、扇子を扇ぎながらこちらを見て「こんにちは」と言う。

透き通るブラウンの髪に瞳。180cmの華奢な体型にその整った容姿は、反則以外の何物でもない。くそ、羨ましいったらない。

俺は自分の170cmの身長を悔みつつ舌打ちした。

それにしても、蓮のせいで崩壊した教室のドアと蓮のせいで横流しされたスタ部の部費の事で彼が居た事を知らなかった。不思議に思いながら、あ、ども、とお辞儀して彼の元へと向かう。

「すみませんね、えつと……。」

「二年の真崎蒼空と言います。宜しく願います。」

「一年の椿涼太っす。宜しくお願いしますね蒼空先輩。…それと迷惑ばっかかけてるようですいません。」

「いえいえ滅相もございません。」

蒼空先輩は手をさしのばし、張り付いたような笑みを浮かべた。俺も手を伸ばし、蒼空先輩と握手する。それで気付いたのだが、周りには蒼空先輩のほかに小さい背丈の黒髪の少女や、中肉中背の黒髪の少年も見当たった。そして気付いた。…自分は一番最後に来たんだと。

「…あの、すいません。遅かったみたいっすね。」

「大丈夫だ。大丈夫だけどな。少しつつこませてもらっていいか？」
中肉中背の少年が俺に言った。何だろうと若干戸惑いながらもはいと頷くと、一息に少年は言った。

「まずドア芋虫化計画って何だ？チヨイスが分かりにくい。それとスタ部の横流しってなんだ、初耳だ。最後に何故ドアがへし折れてて平気なんだよ？」

…一気にそう言われ、一瞬啞然とする。蓮が幼馴染みな時点で俺にとってこれくらいの事は日常であるから、彼は一般人なんだなアと感心した。周りが周りなのでそう言う奴と話すのは楽しくて、若干楽しみながら弄る事にした。

「……分からなかった？」

「何で敬語とれてんだ！そのどや顔ウザいんだけど！！何その分からねエのだっせーみたいな、普通分からんわ！！」

「太郎、うるさいわ。黙りなさい。」

黒板に向かっていた少女がチヨーク片手に振り返った。後ろを向いていたので分からなかったが、なかなか整った面持ちをしている。てか、制服が変にロリータになってるのは気のせいかな？目をこらしたが、再度黒板にむかって書記の仕事をこなす彼女が忌々しげにその制服に目を落としたのを見、つつこむのはやめておこうと思った。

少年——太郎と言っのだろう。太郎は、どもりながらも文句を言いたげだ。

「…あ、遅れたが俺は二年書記、鈴木太郎。宜しくな、椿。」

「宜しくなタロ君。」

「タッ…!？」

「一般人だし。ツッコミだし。俺と身長同じくらいだし、タロ君って何か可愛いし。決定な。」

「いや前半は事実だ認める！だが、タロ君って何だよ犬か!！」

「俺ん家ペット飼った事ねェんだよな。」

「なれってか!!俺にペットに!!」

「マジ?なってくれんの？」

「なるかアアアアア!!!」

太郎、改めタロ君はアとため息をついた。俺はそんな姿を見て初々しーなアと肩を震わせながら笑う。が、次のタロ君の言葉で俺は笑顔を消した。

「で、お前その眼帯何だ?ものもらいか？」

…一番聞かれるとは思っていたが、あいつの居る前か、と苦笑する。ちらと蓮の方を見ると、らしくもなく視線が泳いでやがる。あー調子狂うな。とってつけたような効果の無い笑みを浮かべ、冗談交じりに呟いた。

「…中学ん時、机の角に目エぶつけてそれ以来。ちょっとおかしいからかつこつけも兼ねて。」

「…そうですか。」

反応したのは蒼空先輩だった。驚いて見るとにつこり笑って緩んでいる目元が若干面白そうに開かれてた。やばいばれてるな。

これ以上この話題をしていると、死地に追い込まれる気がしたので(蒼空先輩に)、話題を変えようとした。

「…それよりよオ、おめー名前は？」

そう黒髪の少女に尋ねた。容姿などから一年だろうとタメで言うのと、若干いらついたように彼女は振り返った。

「…敬語。」

「あ？」

「私は二年書記の楠木都古よ。敬語は？」

少女…都古は攻撃的な目線で俺を鋭く見る。誤算だった。小さいから一年だと思った。…とかも言えない。どうする、どうするよ俺。身長が小さいからって一年下に見るなんて最低野郎のする事だ、現に馬鹿は俺の事小さい小さいうるせエのはウザい。くっそ、俺だつて好きでこの身長じゃねエんだよオオオオオオ！！！！

「…良いや。おめーは可愛いから都古で。」

「ふざけないでくそ眼帯。ファッションとかまじきもい。」

「はいはい。」

「触れるな。」

内心かなり傷つきながら（半分嘘だが）、真ん中にあるテーブルに座ると、かつ、かつ、と言う革靴の音。もうメンバーは居ないはずだから、来るとしたら、……。

そこに居る全員の表情がひきつった。…来る、顧問の馬鹿が。

「…蓮う。俺じゃねエよなスタ部の件。悪いのはタロ君だよな？」

「そ、そ、そんな訳ないだろ。楠木、何か良策は…。」

「会長が悪いんでしょ要するに。」

「きつと…真崎副会長が何とかするよ。」

「僕に振られましても。」

全員がそう言う話をし、颯爽と現れたのは……。

<会計視点>； 私立桜町第一高校その5（後書き）

スイマッセンでしたアアア！

と勢いよく謝りますジャンピング土下座です。キラーパス&駄文
申し訳ございません。

ここまで読んで下さっている方はサハラ砂漠並みの広い心を持つ
ている方だと思います（泣）

私自身、リレー小説を通してどんどん文才をあげたいと思います
ので、生暖かい目で見守っていてください。

では、次は無限の闇先生、お詫びの意を表しつつ宜しく願います。
ます。

大空視点 私立桜町第一高校その6（前書き）

どうも、6番バッター、無限の闇です！

かなりgdgdになってしまいましたが、精一杯頑張りました！
なので、暖かな目で見ていただけると嬉しいです！

それでは、私立桜町第一高校その6、大空視点。
はじまり、はじまり…

大空視点 私立桜町第一高校その6

ここは桜町第一高校生徒会室へと続く廊下…

今、この廊下を一人の男子生徒が歩いている。

今は放課後。

ほとんど生徒は帰宅しており学校内にいるのは部活や委員会等で残っている少数の生徒と教員のみである。

そしてこの廊下。

この廊下はこの時間になると、生徒会役員とその顧問以外は使用することはない。

そして既に生徒会役員の面々はこの廊下を使用し、生徒会室に向かった。

つまり、現在この廊下を使用するのは、残りの顧問のみである。

しかし、彼は顧問でもなければ役員でもない。

彼…くろみや久留宮 おおぞら大空は、頭に巻いた長めの黒地のバンダナをはためかせ、赤と青のメッシュが入った黒髪を揺らしながら生徒会室を目指した。彼が何故、生徒会室を目指しているのか、それは生徒会室に行けばわかる。

「ここか…」

大空が角を曲がると、『生徒会室』と書かれたプレート掛かっている教室を見つけた。

俺は、生徒会室の手前まで来ると、あることに気づいた。

「扉が…曲がつてる？」

その生徒会室の扉は他の教室と同じで横開きのようなのだが、何故かグニヤリとひん曲がっていた。

「そういう扉なのか？」

等と疑問に思ったが、まあいいやと、その扉の中、生徒会室を覗きこんだ。

「どうも…」

顧問が来ると思っていた彼らは、見知らぬ生徒が覗きこんできたので、ホッと胸を撫で下ろした。

そして、その見知らぬ生徒に呼び掛ける蓮。

「来てくれたんだね、久留宮先輩」

俺は生徒会室の中に招かれ、近くの椅子に腰かけた。

「ていうか、何でお前がなんだよ。久留宮」

俺が椅子に座ったと同時にいかにも普通という感じの男子生徒、鈴木太郎が聞いてきた。

彼は、1年の時から同じクラスであるが、名前位しか知らない、とつか、俺はあまりクラスの人と話さないので関わり合いがないのは当たり前か…。

「ああ、呼ばれたんだ。その蓮って子に…」

そう言っつて、机に座っている中性的な顔立ちの美少女、釘宮蓮を指さす。

（回送）

昼休み…

俺はいつものように誰もいない屋上で空を見ていた。

「師匠。貴方は一体どこに行ってしまったんだ…」

そう呟くも、その質問に答えてくれる者など誰もいない。

俺は溜め息を吐くと手に持っていたファンシーな柄の弁当箱を置き、開けた。

そのファンシーな柄に似合わず、その大きさは重箱位ある。

その弁当には、色とりどりのおかずは入っていて凄く美味しそうだ。

この弁当は、俺の姉と妹が朝早く起きて作ってくれた大切な物だ。

俺は二人に感謝しつつ、弁当を食べようとした。

そのとき、

「たのもー！」

突然、屋上出入口を蹴破って一人の美少女が現れた。その少女は啞然としている俺の所に笑顔で近付いて来た。

「えっと…何か用かい？」

そんな彼女に恐る恐る聞く。

「貴方が久留宮大空？」

しかし、彼女は俺の質問に答えず逆に質問してきた。

「そうだけど、君は？」

俺はその質問に、一応答え更にこちらからも聞き返した。

「私は1年の釘宮蓮、生徒会長だよ」

その少女は釘宮蓮と、そして生徒会長と名乗った。

「釘宮蓮、生徒会長… ああ…」

その名前には、聞き覚えがあった。

1年で生徒会長に立候補、多数の支持を受けて当選等と校内新聞に書いてあったのを見たことがあった。

と言うか、あれ運はすって読むのか。俺、蓮れんって読んでた…

（自分もです… すいませんでした… Mr・あいう先生… by・無限の闇）

「で、その生徒会長が俺に何の用で？」

俺はさっきの質問を、微妙に変えてまた質問した。

「今日の放課後、生徒会室に来てよ」

「え？」

く回送終わりく

「という訳で来たんだ」

「え？何？それだけ？それだけで来ちゃったの？」

「ああ、そうだ」

「どんだけだよ！どんだけ純粹なんだよ！」

「俺は水じゃ無いぞ」

「純水じゃねーよ！清らかな心の方だよ！」

「ドン底に落ちたら、更に掘れ！」

「。原でもねー！」

「母さん、僕だよ……」

「スケ。ヨだよってやめーい！ほとんど原形をとどめてねーじゃねーか！て言うか良く分かったな俺！俺凄いい！」

「あんた、さつきからうるさいわよ」

俺達がそんなやりとりをしているとき、先程まで黒板に向かって何かを書いていたおかしな制服を着た美少女がこちらを振り向き太郎に注意をした。

「俺か！俺が悪いのか！」

「だからうるさいって」

そして今度はこっちで小さな抗争が起こっているとき、

「おめー、何で先輩を呼んだんだア？」

白い眼帯を着けた男子生徒が先程からあの二人のやりとりを見ていた蓮に聞いた。

よく見ると、なかなか整った顔立ちをしている。

「ん？生徒会に入れるため」

その質問にあっさりそう答える蓮。

「何でエ？」

「面白そうだから」

「何が面白そうなんだよ？」

「格好が」

「それだけで呼んだ…んだろうなア、お前の事だから…」

「まあね」

「失礼。会長…」

白い眼帯の男子生徒が呆れて溜め息を吐いたとき、扇子を持った美

少年が彼らに微笑を浮かべながら近づいていった。

「どうしたの？」

「ひとまず、自己紹介をしませんか？彼も僕達の名前すら知らないと思いますので…」

その美少年は、微笑を浮かべながらそんな事を言ってきた。

「ああ、そうだね」

その提案を蓮は承諾した。

「まず、私。と言ってももう知ってるだろうけど。1年、釘宮蓮。会長だよ」

「ああ」

「真崎蒼空、2年、役職は副会長です。よろしく」

扇子を持った美少年、蒼空は、そういつて手を差し出し、握手を求めてきた。

「ああ、よろしくな、蒼空」

その手を俺は笑顔で掴む。

「俺も知ってるだろうが、鈴木太郎、学年は一緒、役職は書記だ」

「よろしく、太郎」

「私は、楠木都古。そいつと同じ書記よ。学年は2年」

奇抜な格好をした美少女、都古は手に持っていたチョークを置き、振り向きながら答えた。

「よろしく、都古。面白い格好をしているな」

「あんたに言われたくないわよ」

俺の言った事に都古は眉間に皺を寄せて言い返した。

「俺は、椿涼太、1年っす。役職は会計。よろしく、えーと」

涼太は、何か困ったような顔になった。

「？」

俺は何に困っているのか分からなかったが太郎が、

「お前の名前」

と、俺を指差しながら言ってきたので、俺はとりあえず自己紹介をした。

「俺は久留宮大空、2年だ」

俺が自己紹介を終えると、涼太は先程の何かに困ったという感じの表情ではなくなり、言った。

「よろしくつす、大空先輩」

「?よろしく…」

俺は先程、何故、あんな顔になったのか疑問に思ったがとりあえず言葉を返した。

「んでよ…前から気になってたんだが、何でそんな格好してるんだよ?お前」

全員の自己紹介が終わると、太郎が俺の格好について聞いてきた。確かに、頭にバンダナを巻いて、髪に赤と青のメッシュ入れ、目に赤と青のカラーコンタクトを着け、腰にナイフ掛けてたら、誰でも気になるだろう。

いや、気にならない方がおかしいか…

しかし、この生徒会も結構おかしな格好をした人が数名いるがな…

「これは…俺が尊敬する人の真似をしているんだ…」

俺が尊敬する人…師匠…

俺は…貴方を絶対に見つけて見せる…!

「ふーん…」

太郎が不思議そうな顔をした、その時、こちらに近づく足音が聞こえた。

「来たね…」

「来ましたね…」

「来たなア……」

蓮、蒼空、涼太がそう言ったと同時に誰かが生徒会室に入ってきた……

大空視点 私立桜町第一高校その6（後書き）

他の作者方、申し訳御座いませんでした！

皆さんが考えた彼らを上手く活かせなくて…

そして、お茶先生、こんなつまらないパスになってしまつてごめんなさい…

そして、読者の皆さん、他の先生方の面白い話を読んだ後にこんな自分の駄文を読ませてしまい、すいませんでした…

これからもっと精進します！

それでは、ラストバッター、お茶先生よろしく願います！

＜顧問視点＞ 私立桜町第一高校その7（前書き）

どうも、7番レフト、お茶です。

何か色々すみません

反省はしている。だが、後悔もしている。
つまりはそういうこと

<顧問視点> 私立桜町第一高校その7

教員用にと作られた喫煙室で煙草をふかしている男がいた。

……まあ、俺なのだが。

双眼鏡を片手に、向かいの棟にある生徒会室を覗く。

奇人問題児生徒会長「釘宮蓮」がドアを蹴り壊すところからはじめ、無敵超人（社会的な意味で）の「真崎蒼空」。眼鏡をかけていればツツコミとしては完璧の「鈴木太郎」。ヴァイオレンス・ゴスロリ「楠木都古」、そしてTHE 天然の名を欲しいがままにする「椿涼太」

生徒会メンバーが一通り揃ったのを確認すると、半分ほど燃えた煙草を灰皿に押し付けて喫煙室を出る。

エレベータで一階まで降り、渡り廊下を歩く。向かいだった棟まで歩くと、またエレベータに乗り五階まで上る。

ペタペタと薄っぺらいスリッパの音を響かせながら一人歩く廊下は、なんとも言えない。

生徒会室に近づくにつれ人通りが少なくなっていくのは、ドアを蹴破る音に何かを悟ったのか、単純に超個性的な生徒会役員に関わりたくないのか。おそらくどちらもだろう

俺だって、あいつ絡みでなければ生徒会顧問教師なんざやってなかっただろうしな。

さて、ようやくついたみたいだ。

随分と風通りがよくなった生徒会室に足を踏み入れる。

「や、やあ、二宮先生。ご機嫌麗しゅう、本日はお日柄もよく……」
「会長、固いです。バレますよ？」

「な、何を言っているのかな？真崎副会長。一生徒として目上的人物である教師に敬意を払うのは当然の事さっ」

あからさまに可笑しい態度。なんだこいつら、わざとか？それとも天然なのか？

最初から見ていた人間としては、いたずらが見つかった子供がなんとか誤魔化そうと必死になっているようで微笑ましい……ような気がしないでもない。

「このドアは？」

「ああ、それは両手が書類でふさがっていて開けられなかったから蹴破ったんだよ（キリッ）」

擬態語はセルフサービス（笑）

予想外の返答に視線をドアだったものに固定したまま固まる。さっきまでうるたえてたのはドアの事じゃなかったのか？

その時ちらりと視界の端に見えたのは、書類の山。そういえば……そういえば、釘宮がおこした事の中に直接俺が関わった問題があったな

「……スタント部」

「ぎくっ」

「部費の横流し」

「ぎくぎくっ！」

「火薬」

「ぎくぎくぎくうっ！！」

そこまで言うつと釘宮は力尽きたかのように項垂れる。ちょっとした優越感。

あの時は俺の給料がかかっていたから会計係の椿を説教した。あくまでも表向きは、だが。

スタント部……いいじゃないか、スタント部。何がいいって名前の響きが。ほんの少し点を加えればスタンド、スタンド使いになる事

は男の夢だ。

閑話休題。

再び生徒会室を見渡す。

頂垂れる釘宮とそれをなぐさめる真崎。我関せずな楠木。呆れたと言わんばかりのため息をつき、窓の外を見る椿。そして、何か言いたそうにこちらを見つめる鈴木……と？

「あー……、どうも」

たまたま目が合い、軽く会釈する久留宮。

渡された書類には久留宮の名前なんて載ってなかった気がするが……

「なんか、現生徒会長に勧誘されました」

あ、そーゆーこと

「いやなんでそこで会得いったみたいな顔すんだよ。そもそも何でそんなに冷静なんだ！？ドアが木っ端微塵になってる（過大表現）んだぞ！？火薬取引（だいたい合ってる）してるんだぞ！？おいこらなぜそこで哀れみの視線を向ける。飴ちゃん？いらねえよ！いやかつば巻きもいらねえから。つか何でかつば巻き？なにそれ遠まわしな嫌がらせかよ。ってどこから出したんだそれ！？あんたさつき手ぶらだったよな？俺の見間違い？んなわけあるかあ！！」

ぜーはーぜーはー

溜まってた何かが爆発したようにノンストップノンブレでツッコム鈴木。もとい新八二号。君のそのツッコミを称えて丸眼鏡を贈りたいものである。

ぜーはーぜ、げほっ

一息もつかずツッコんで軽く酸欠気味になる新八二号を楠木が指し

て笑っているのは、ある種のお約束か。

まあ、そんなこんなで俺と生徒会役員 + α の邂逅は幕を閉じたのだ
った。

「勝手に終わるなあっ！」

終わるったら終わる

<顧問視点> 私立桜町第一高校その7（後書き）

尻切れトンボ……というか終わり方が無理やりすぎるorz
都古ちゃんと涼太喋ってないし……いや、すみません

あと太郎のツッコミに面白さの欠片もないのは自分の力不足ですね。
いやもう土下座しますわ。

とりあえず、これで1章完？ということでは

お粗末さまでした>（――）<

<・会長視点>・ お菓子と紅茶と爆弾と（前書き）

というわけで一周回って戻ってきましたM r・あいうです。
やはり何度やってもトップバッターは慣れませんか・・・

ですが、つたないなりに全力を尽くしたので、どうか見捨てず、
できれば楽しんでください。

六月。

今年も律義に梅雨前線はやってきて、天気は頭といわず体まで洗えてしまいそんな土砂降りだった。

まるでテレビの砂嵐のような雑音が校舎の中にまで響き渡り、放課後の廊下に響く。

いつもは穏やかな海も白く泡立って押し寄せては、石垣に当たって碎けるのを繰り返す。

しかし、自分たちの運動場いばしやを奪われた運動部たちは廊下や階段を使って自らの下半身を鍛えているし、中には土砂降りの運動場に繰り出す猛者たちもいる。

結局、そんな雨の中でも桜町第一高校はその熱気を失わず、ただ内に押し込めただけだった。

そんな晴れの日より騒がしい校舎の中。

どこからか、きれいな歌声がきこえてくる。

「し〜おかつぜっか〜お〜る〜ま〜なびっの〜そので〜」

、
か〜けつるわ〜こ〜う〜ど〜〜れ〜きつしつを〜つ〜く〜れ〜
〜・・・」

学校の校歌という最も面白みの無い歌をご機嫌に歌い上げているらしいその少女こそ、私立桜町第一高校生徒会会長、釘宮 蓮その人だった。

幼馴染の椿 涼太に掃除を押し付けた罪悪感など全く感じず、トテと階段を二段飛ばしで上がっていると、階段スクワットをしている学生とは思えない筋肉むき出しの集団と鉢合わせした。

「あ、会長、チワ〜ス！」

「「「チワ〜ス!!!!」」」

最も筋肉を盛り上げている部長らしい人の挨拶に続き、野太い男達が挨拶を復唱する。

「ん、頑張ってるね〜。感心感心」

確実に上級生であろうその集団に対して、少女は何の敬語もなしに手をひらひらさせながら挨拶を返す。

だが、そこには先輩達を軽く見ている様子はなく、ただ『友達』に挨拶を返したという様子。

それが彼女の長所であり短所。彼女の個性だった。

「オラア!!!!あと100周はいくぞおテメエラア」

「「「押忍!!!!ありがとうございます!!!!」」」

己の肉体をみなぎらせながら階段を下りていく集団を一瞥し、彼女はポツリとつぶやく。

「・・・あのノリ、いいなあ」

彼女は、奇妙な価値観の持ち主だった。

「しりつゝさくらまつちゝだゝいゝいゝちゝこうこゝゝ・・・」

三番までキレイに歌い上げたところで、私は生徒会室にたどり着いた。

私の蹴りで生徒にオープンなフォルムとなった扉（枠のみ）をくぐると、すでに数人待機している。

芳しい紅茶の香りを漂わせるカップを片手に、パッケージにフランス語の書かれたお菓子をつまみながら。

なぞの英国風空間が桜町第一高校の生徒会室に出現していた。というか、お菓子は私宛の荷物なのだが。

「どうも、会長。届いた荷物、お先に頂いてます」

優雅にお菓子をつまんでいるのは副会長の真崎 蒼空。

いやあ、どこかの貴族の血が流れているんじゃないかと思うほどさ
まになっている。

「おお、会長。しかしこれうめえわ」

豪快にお菓子のみをむさぼっているのが野生児の久留宮 大空。

ずいぶんなファッションセンスの持ち主で『師匠』と呼ばれる人物
のリスペクトらしいが、常にナイフを携帯していたり、バンダナを
つけていたり、一言で言うと全身で個性を主張しているかのような
風貌だ。

おまけにどこかの山賊の血が流れているんじゃないかと思うほどガ
ツガツしている。

「会長！何ですかこれ！？何でこんなものが差出人不明で送られて
くるんですか！？」

正体不明の人間から送られてくる食べ物に警戒しているのが書記の

鈴木 太郎。

反応が普通だ。

「・・・・・・・・うめえ」

なんか必要以上に味に感動しているのが顧問の二宮 一人。
根が貧乏なんだろう。

と、そこであることに気づいた。

「ねえ楠木ちゃんは？」

「ああ、なんか少し用事があるとかで、椿君のことは知りませんが」

「ああ、涼太はいいの」

本来二人に割り振られた掃除場所を一人でやらせていることは黙っておこう。

「そうですか。で、会長。やけにご機嫌ですね。昨日までは『火薬がしけて使えない！梅雨なんて嫌いだ！』と自然現象に文句を言っていましたか、どうかしました？」

くそう、この副会長、やたら声帯模写がうまい。
すごく似ているのがなんかむかつく。

「いやあ、それがね……………」

と、言うが早いか電光石火、唯一人のお菓子を勝手に食べない一般常識を持ち合わせている鈴木に向かってフランス老舗お菓子店の日本円にして軽く五千円はくだらないであろうお菓子を口に詰め込む。

「わあかいちょムギユ……………うまいですね、これ」

お菓子とともに文句を飲み込ませる。

つまり、これで全員の口に私宛のお菓子がいきわたったわけだ。

「クツクツク、罨にはまったわね！」

と、生徒会室にいる全員の顔を指差した。

一瞬、気まずい沈黙が流れたが、その気配を察して真崎君がいち早く突っ込みを入れてくれた。

「どういうことでしょう？」

「フッフッフ、良くぞ聞いてくれました！久留宮君！そのお菓子のパッケージにはなんて書いてあった？」

ビシッと真崎君の隣にいる久留宮君を指差す。

「なんか『すごくおいしいお菓子だから食べちゃだめだよ』って書いてありましたか」

いきなり振られたのにもかかわらず冷静な切りかえし。
さすが、私が目をつけただけある。

「そう！それこそが私の罨だったの、食べるなどいわれたら食べてしまいたくなる人間の心理をついた、完璧な心理トリックなの！！」

「へえ、すごいですねえ」

パチパチパチと、真崎君の拍手のみがむなしく響いた。

なんか、思ったより反応が薄いし、心なしか真崎君以外の三人の目が冷たい気がする。

普段は暖かい生徒会室を、なぜかやりきれない沈黙が襲う。
その沈黙を振り払うために普段より大きい声を出す私。

「っで！私のお菓子を食べた代わりに君たち四人にあることを要求したいのよ」

「（はぁ・・・）で、何ですか会長」

「あれ、心なしかかつこの中が垣間見えた気がするよ鈴木君？」

「気のせいですよ、それより、要求したいことって？」

「・・・・・・・・まあいいわ。そう！それで要求というのはね、今から見るものについて決して他言しないこと、わかったら復唱して！」

「・・・・・・・・誰も復唱しなかった。」

「・・・・・・・・うん、その沈黙はわかったととるね。で、真崎君、そのおかしの箱とって」

「はい、わかりました」

なんか真崎君が必要以上に楽しそうな顔をしている。
まあ、箱はきちんと取ってくれたから別にいいや。

「ありがと、で、この箱実は生徒会メンバーとか税関の目を盗むためにある特殊な仕掛けがしてあってね、ここの、この模様をこすると・・・・・・・・」

「何で税関の目を盗む必要があるんですか！」

「まあ、一応非法だし」

「音符をつけてもだめでしょ！」

そんな会話を普通人代表鈴木君としているうちにカチツと音がして、箱の底が開く。

底に入っていたのは軽く飛行機でもジャックできそうな大量の火薬。
ああ、やっぱりいつ見ても心が弾むなあ♪

「ええええええええええ！！！！！」

と、私とはま逆のテンションの久留宮君と鈴木君が同時に叫んだ。

真崎君と二宮先生は普段どおりの顔だけど。

「い、いいんですか先生？」

「え？まあこいつならこれ位するとは思って心の準備しといたし、見過ごした国に責任あんだから俺に通報する責任ねえし」

「え、えええええ」

なおも不満そうな（というか半分泣き目な）小市民。

やがて吹っ切れたのか半分やけくそでこんなことを聞いてきた。

「ていうか、これ誰が送ってきたのかわかってるんですか？」

「うん？お父さんだよ。今ヨーロッパの方で旧ナチスを相手取って義賊してるからね」

「……………」

それ以上聞いたらやばいことに片足突っ込みそうな雰囲気を感じたらしい鈴木君。

やがて、最初よりはるかに楽しそうな真崎君がこんなことを聞いてきた。

「で、このティーカップのセットと高級茶葉の袋にはいったいどんな危険物が入ってるんですか？」

「え？それって他の誰かが持ってきたんじゃないの？」

「あれ？このお菓子とセットじゃなかったんですか？」

「え？」

「おや？」

「ん？」

「はい？」

それぞれ疑問符を口にしたところで、生徒会室のメンバー全員の声が奇妙に重なった。

「「「「「これ、誰の？」「」「」「」

<会長視点> お菓子と紅茶と爆弾と（後書き）

書いてる途中でとんだ悪送球だと気づきました。

十六夜神月さんすみマセン！

大暴投ですが、何とか続けていただければ・・・

< 副会長視点 > お菓子と紅茶と爆弾とその2（前書き）

早くも2周目が回ってきた十六夜です。

明らかに駄文な上、あいう先生の繋ぎを活かしきれいていません。

さらに繋ぎも次の展開を縛ると言う最悪の物です。

また時計堂先生に謝罪しなければなりませんね。

まあ、こんな僕が書いた駄文ですが、

見捨てずに呼んでいただければ幸いです。

< 副会長視点 > お菓子と紅茶と爆弾とその2

さてと、新たな事件が幕を開けましたね。

その名も『ティーセットと高級茶葉は誰の物だ!!』（命名僕）

……僕ってネーミングセンス皆無ですねえ。

まあ、そんなことはどうでもいいのです。

『スン』

「あ、確かに同じ様に送られて来た訳じゃないみたいですね」

「え？どう言う事ですか？」

聞いてきたのは真面目に悩んでいた鈴木君。

いやあー普通人（まともと言う）ですねえ。

「匂いが違いますから」

「え？いや、当然違うんじゃない？」

「あ、お菓子とティーセットが元来持っている匂いではなくてですね、

運ばれてくる途中についた匂いとかですね」

「は！？そんなのわかるのか！？」

「ええ、ちなみにさっきのお菓子からも火薬の匂いが」

「「ええ！？」」

おお、珍しく会長も突っ込みサイドに回りましたね。

「なんで分かったの！？警察犬でも気付かないレベルで遮断されてるはずだよ！？」

「まあ、中のお菓子を直接口に入れた訳ですからね」

「ああ、なるほど」

「何でそこで納得するんだよ！？」

「え、だって、それぐらいで驚いてちゃダメだよ」

「いや、驚けよ！？」

「驚いちゃダメだね！！」

「何故！？」

「それが普通だから」

「普通じゃねえよ！！！！！！！！」

『ゼエーハァー』

「鈴木君、もう少し体を鍛えるべきでは？」

「すまん…もう無理」

「残念♪」

いやあ、相変わらず律儀に突っ込んでくれるますねえ。

えーっと、

「何を考えていたんでしたっけ？」

「忘れるなよ！！」

再び突っ込んで力尽きる鈴木君。

力尽きるのなら突っ込まなければいいのに。

そして出来れば突っ込みでは無く、何を考えていたのか教えるのに

その体力を使ってほしかったですね。

「ティーカップと高級茶葉が誰のか。じゃないのか？」

「ああそうでした、ありがとう御座います。久留宮君」

「いやいや、ちなみに俺のじゃないぞ、多分な」

「ふむ、鈴木君は？」

「俺のでもねえよ、多分」

「ふむ、鈴木君も違う。となれば二宮先生は？」

「俺のじゃあないなあ、多分だが」

「なるほど、僕はこんな粹な物を贈ってくれる親戚は…」

まあ、いないでもないですが」

「（ん？今真崎副会長の微笑が崩れかけたような）」

やばいですね、会長にばれる所でした。

あの親戚はどうも苦手なんですよねえ。

「しかし、僕に贈ってくるときは何かしらサプライズがありますからね」

「サプライズ？」

「はい、前は箱を開けた瞬間にナイフが飛び出してきました」

「「なんだそれ！？」」

「なにそれ！なにそれ！？」

久留宮君と鈴木君は普通に驚いたような反応を、

会長は面白そうに身を乗り出してくる。

二宮先生は相変わらずだるそおーにしている。

「まあ、そう言う亲戚なんですよ」

僕はそう言って深く言及することを避ける。

あまり触れられると、墓穴を掘りかねない。

ことこの話題となると、どうも調子が出ないのだ。

まあ、そのうち分かるだろう。…僕の過去と共に。

「さてと、会長の物ではないのは既に分かっていますから、

となると、ここにいない椿君か、楠木さんの物と言うことですね」

「むうー、誰のだろう、早く知りたいなあ」

会長がするように不満を洩らしている。

しかし、

「とりあえず、一人は来るようですよ？」

「」「え？」「」

僕の言葉に二宮先生以外の3人の声が重なる。

「誰かの気配がしてますからね」

「あ、本当だ」

会長も気付いたらしい、久留宮君も「ああ」見たいな顔をしている。

鈴木君だけは「え？え？」みたいな顔だけれど。

ちなみに、二宮先生は欠伸なんかしている。

どれだけ無気力なのだろう。

まあいい。とりあえずは、この気配の主が来てからですね。

「さて、誰でしょうかねえ？」

そう言つて、蒼空は何時もどおり微笑を浮かべ、

蓮はわくわくと言つた音がつきそうな感じで入り口を見つめ

太郎は大空を気配感じるのか！？と何故か問い詰め、

大空は太郎の勢いに押されながらも問いに答え、

二宮は無気力ながらも、楽しそうにそんな4人を眺める。

そんな奇妙な光景が展開されている生徒会室に、

迫っているのは誰なのだろうか。

<・副会長視点>・ お菓子と紅茶と爆弾とその2（後書き）

最悪な繋ぎですね…

とりあえず、時計堂先生に謝罪してきます。

それでは！時計堂先生お願いします！！

<鈴木書記視点> お菓子と紅茶と爆弾とその3（前書き）

うわあああ、ついに来てしまいました。時計堂です。

とりあえず、椎名さんごめんなさい……。

「蓮うううう！ 掃除をさぼってとんずらこきやがってんじゃねえよって……なに？ この空気」

ひょっこりと出てきた眼帯に、思わずため息をつく。なんだ……椿か、なんて言ったらなんだってなんだよ、なんてツッコミ役が突っ込まれるという驚異の状況に追い込まれるので自粛。疲れ切った体をふらふらとさせながら、部屋の端にあるパイプ椅子に腰かけた。再度ため息をつき、空中浮遊する糸くずのような埃を見上げた。呼吸に伴って埃が舞い、まるで風を操っているような気分になる。

にこにこ嬉しそうな会長は、楽しそうに机に頬杖をついて周りを見渡す。

「安心して。涼太にはお茶をたしなむ趣味なんかないよ」

「は？ 話の流れがぜんっぜん読めねえんだけど」

「実はですね……」

そばにいた真崎が椿に説明を始める。ああ、それにしても体がだるい。

……昔は、こんなんじゃあなかったんだけどなあ。

最近『趣味』も我慢しているから、運動不足ぎみなのかもしれない。それとも、モリモリ食べてるから太った？ ……いやいやいや、それは考えたくない。

わずかに舌の上に残るほのかな甘みが跡形もなく消えた頃、椿が腰に手をあてて首をかしげ、言い放つ。

「んなもん、どうでもいいじゃねえか」

「よくねえ！ 大いによくねえんだよ！ おおらかにもほどがある！」

何でそこで清流のごとく流す！ 飯にも知り合いが食べてんだぞ！ と、そこでその知り合いに目を向ける。雨粒が窓に叩き落ちては滑り落ちていく窓を背景に、うつすらとした微笑をうかべて扇子を

あおぐ副会長。人の気配を察知できて、犬以上の嗅覚を保持する副会長。

うん。こいつなら大丈夫だ。

ふらつと無駄に長い手を持ち上げ、はいはいといかにもやる気なさそうに二宮が手を上げる。とりあえず、「どうぞ」と意見を促してみる。仮にも教師だ。何かいい大人の見解を披露してくれるかもしれない。人は見た目じゃないしな、うん。

「あー、とりあえず生徒の安全を守る立場にいる顧問から言わせてもらうとだな……まあ、たぶん危ないけどいいじゃん。うまいし」「いいじゃんって何だよ！ たぶん危ないって、わかってんじゃない！」

「いや、うまいよこれ」

「うまいとかそういう問題じゃねえええええ！ なんかおまえは何でもうまいって食べてそうな気がする！」

「何気に失礼だな、オイ」

肺から酸素および二酸化炭素がすべて排泄、呼吸困難。つまりは息切れ。

肩を上下に動かしつつも、だんだんと麻痺してくる頭。なんでわざわざ突っ込んでやってんだよ自分。答えは簡単。誰かが突っ込まないと、ボケ倒しになってしまう！

苛々とする中、ふっと浮かんでは消えるのは、昔なら躊躇なくやっていたこと。

ああ、殴りてえ。

「まあまあ、疲れた時にはレモンティーがいいですよ」

真崎の足音とともに近寄る、高級茶葉のいい香り。鼻孔をくすぐるその香りに、思わず気が抜けた。

「どうも……って、例の危ない紅茶じゃん！ しかもレモンはどこから出てきた！」

しかもストレスにきくのはカルシウムだ！ ビタミンCは関係ないぞ！

そんな俺に向かって、会長がぐつと親指を突き出す。

「生徒会室に冷蔵庫は必須だよ！」

「いらねえええ！どこから持ってきたんだ！」

部屋の隅で、鈍い銀色を光らせる箱こと冷蔵庫あり。高校生の身長をはるかにしのぐ巨体に、三人ぐらいなら冷凍保存できるぜって感じの横幅。……あれ、ぜってえ業者じえねえと入らねえだろ。そもそもこの部屋の扉より明らかにでかい。

「おい蓮。この前スタント部と交渉した時の、あれじゃねえのか？」

「なんでスタント部が冷蔵庫持つてんだよ、しかも業務用！どこまで引つ張られたら気が済むんだスタント部！」

「私と関わりが深いから話くらい引つ張れるよ！」

「引つ張るな！」

うつ、目眩までしてきた。……季節の変わり目に具合が悪くなるから、あまりストレスは溜めたくない。のに。

もう一度、ティーセットと茶葉の缶に視線を移す。どちらも言わずとも知れた、高級ブランドのラベル。真っ白な陶磁器を持ち上げて、まじまじと見つめて見た。

俺の友人関係に、こんな物送ってくる奴はいないなあ。みんな、質より量ってやつらだし。もしも俺に恨みがあつて送られたんなら……もうちょつとあからさまかな。その中身を口にした人間も、無事では済まないだろう。

「毒とかに耐性持つてそうだし、いいか……」

「何か言いました？」

「いえいえ」

かちやり、と小さな音を立てて机の上に置く。置かれたティーカップに注がれた薄茶色の液体は、蛍光灯の光を妖しく反射する。

一瞬、外の景色に目がくらむ。それに続く、低い地鳴りの音。……

……雷が落ちるほど、外の雨はひどくなっているのか。

「それにしても、楠木さんの用事ってなんですかね」

「いいんじゃない？ すぐに来るだろうしね」

そうやって頬杖をつく会長の横顔を、一瞬の閃光が照らす。
また、雷が落ちた。

<鈴木書記視点> お菓子と紅茶と爆弾とその3（後書き）

無駄に雷を落してみました、時計堂です。

助っ人として涼太を召喚しました。汐嵐さんにもごめんなさい。

では、椎名瑞夏さん、お願いします！

<楠木書記視点> お菓子と紅茶と爆弾とその4（前書き）

四番手椎名です。

前回のターンに比べても、格段にやばくなってしまった気がしてなりません。

どうか温かい目で見守りください・・・。

「マイスイートシスター！はい、スマイルだよ！」

「消滅する？変態兄」

ドガッ。

バキッ。

「失礼。入るわよ」

会長の都合のせいで、通気性の良くなってしまった入り口の向こうに一声掛ける

と、あたしは遠慮なしに部屋へと入った。

「ああ。楠木書記いらっしやい……………あれ？」

会長がこちらを見て、固まった。

「何か問題でも？」

「いや、問題というか…」

「あんたの用事は一体なんだったんだ！？」

ほら来た。

ツツコミを生き甲斐とする、至って普通人な太郎の声が、あたしと会長の会話を

妨げる。

まあ。

それも仕方ないかもしれないけど？

今のあたしの服装は、一般的常識のある人間なら、目を剥くこと必至の奇抜なものだ。

何故なら、あたしの着ているものは、いわゆるドレスというやつで、真っ白い生地、ピンクのドレープたっぷりなふりふりひらひらし

た、鬱陶しい
ドレス。

所々には、ドレスと共布のリボンが縫い付けられていて、いつもの
ゴシックな制

服と比べても、それはそれは凄いものとなっていた。

ちなみに、頭にはご丁寧にティアラまで乗せられている。

「兄がニューヨークから帰郷してきたの」

「なんで兄が帰郷すると、そんな服になるんだ!？」

「……嫌がらせ？」

「またかああああっ！また嫌がらせなのかあっ！」

理解しがたいのか頭を抱えて、ぎゃあぎゃあ喚く太郎。
かなり五月蠅い。

「うるさいわ、太郎。それでもあげるから、静かにして」

ちよこんとティアラを乗せてやった。

「いるかああっ！ていうか、これ純金だろ！なんだ、純金百パーの
嫌がらせって……！」

……うるさい。

もう放っておこう。

「本当のところは、何があったんのです？」

叫び続ける太郎を無視して中央のテーブルに歩み寄ると、苦笑を浮
かべた蒼空が

聞いてきた。

本当のところは、と言われても……。

……。

……言えない。

ていうか、言いたくない。

帰ってきた兄に拉致されて、目覚めたらカメラの前で

この姿になってたなんて……。

「嫌がらせよ」

「あくまでも、それで通すつもりなんですわね」

「八割事実」

「二割は何なんですか…」

「個人情報だから、教えないわ」

そうあたしが言つと、蒼空は納得いったようないかないような、複雑な顔をして

から、またいつもの微笑に戻つた。

こいつの表情は、読めない。

「それで、皆さんお揃いで何かあつたの？」

言いながら、ぐるとメンバーを見回す。

「いや、それがな…」

皆の視線の先には、ティーセットと、茶葉。

「誰の？なかなかいいセンスね」

思わず手に取つて尋ねると、何とも微妙な雰囲気 flowed。

？

「それが…分かんないんだよ」

「は？」

「差出人不明で送られてきたんだ」

「お願いだ！お願いだから楠木のだ、と言つてくれ！俺飲んじやつたんだよ！」

またも太郎は喚きながら懇願してきた。

目が本気だ。

なるほど、そういう理由ね。

「それは不気味ね。毒でも入っているかもね。ま、あたしは飲んでないから関係

ないけど？」

わざと太郎の不安を煽るようなことを言つてやる。

案の定、ヤツは顔を青くして呻きだした。

カタン。

小さく音がして、会長がこちらに近づいてきた。

手には、紅茶の入ったティーカップを持って。

「な、何よ……むっ!？」

ゴクン。

唐突にティーカップを口に付けられ、思わず一口飲んでしまった。それを見届けると、にたりと不敵に会長は笑う。

「これで、関係なくはなくなっちゃったねえ」

「……………っ!？」

緊急会議。

そう大きく書いて、あたしはチョークを置いた。

「それじゃあ、第一回桜町第一高校の会議を始めるよ!」

嬉々とした表情で教卓前に立つ会長。

なにやら会議という物に興味をそそられたらしい。

「……第一回がこんな会議なんて、何かやるせない気分になるわね」

「はい!では、あのティーセットと茶葉について、何か意見がある人!」

なんでそんなに楽しそうなの…?

会長が言つと、パラパラと手が拳がった。

「では来留宮先輩!」

これまた嬉しそうに指名する。

「妖精の仕業」

「それはファンタジーだねえ。はい、真崎君!」

…ファンタジーで済ませちゃうわけ?

「もう、校長とかからの差し入れてことでいいんじゃないですか?」

良くない。

「投げ遣りになんないでね。はい、二ノ宮先生!」

「旨かったから、別にいいじゃん」

「そっかもねえ…。はい、涼太」

駄目です!

「落ちてきた、でいいんじゃないの？」
だから、だめだって！

（中略）

…もう、なにがなんだか分からない…。

黒板には、取り留めもなく続く馬鹿会議の軌跡がしつかりと残されている。

どこかの部活からの賄賂だとか、去年の生徒会が残っていた物だとかいうのは、まだかなりましな方で。

人格を疑いたくなるのは、空から降ってきた、とか宇宙人からのお近づきの印、とかいう意見。

そして、あたしのベスト・オブ・最悪賞に輝いたのは…。

突然変異。

太郎じゃないけど言わせてもらいたい。

何があつたのよ。

何がどうしたら、こんな意見が沸いて出るのよ…。

ちなみに、本家ツツコミ役の太郎はこの意見が出た際、

「突然変異！？なんで自然を巻き込むんだよ！大体どんなに変で異様なことが突然

起こったって、ティーセットと茶葉は生まれねえよ！まあ落ち着いてお茶でも飲

め？ってそれは問題のお茶じゃないか！俺を殺したいのか、お前は！は？ならかつ

ぱ巻きは？またかよっ！またかつぱ巻きかよ！なんなんだ！いじめなのか！？だから

飴ちゃんもいらねえええっ！！！！」

ご苦労様。

…そんな訳で、謎が解けるのはいつになることやら。

<楠木書記視点> お菓子と紅茶と爆弾とその4（後書き）

うわっ。

これはやばい！

なんかどうしようもなくなっていました・・・。

深くお詫び申し上げます・・・。

そして汐風先生、キラーパスをお許してください。

<・会計視点>； お菓子と紅茶と爆弾とその5（前書き）

こんにちは、二回目の汐嵐です。

五番目なのですが、蓮の回は是が非とも涼太君をカッコ良く！と思つて暴走しすぎました↑

自重しなくてごめんなさいイイイイイイイイイイ！……！
ほんとつ謝るんで許して下さい。今度から空気のようになりますからどうか勘弁して下さい（ノドぐ。）。。

まアこんな阿婆擦れの妄想ですが、付き合っていただければ光栄です。

では、お菓子と紅茶と爆弾と、会計視点。どうぞお楽しみください。

「だから、突然変異で自然現象的に召喚されたんじゃないの？」

「何処からだよ！冥界か、異界か！？天界か魔界か！？どちらにする召喚する訳ないだろ！！」

「自然現象つつってんじゃないん。」

「どっちでも一緒だアア！！」

タロ君とカズの口論は留まる事を知らず、無気力ボケと鋭いツツコミで会議は進行していた。それにしても、タロ君うるせエ。ペットのくせにナマ言ってるじゃねエよ。ハウス！！タロ君ハウス、ビフジャーキーあげるから。

「…椿、心の中の声がだだもれだ。ハウス、じゃねえよ！！」

「あ、聞こえてたのか。じゃあハウス。タロ、ハウス。」

「うぜエエ！てかさつち窓！！飛び降りろってか？！」

「ほら、太郎。フリスビー。」

「久留宮ものってんじゃないやねエ！てか、そのフリスビー何処から持ってきた！？」

いつの間にか、俺なりの良心で言ったハウス宣言のせいでもっと騒々しくなっている。都古はため息をつきながらどこか嘲り笑っているし、蒼空先輩はやれやれと眺めているし、カズは…。ああ、笑ってるか。と、蓮の方をふと見ると、高級そうなお菓子の袋を持ちあげながら何となく優しい表情。どうしたものか、内心彼氏かとひやひやしなから蓮に尋ねる。

「……それ、何だ？」

ふと聞くとびくつと反応し後ろに隠す。これはもうまずい、泣いていいか。そう思った途端、蓮が何かをためらうようにあたふたと言ってきた。

「え…っと、あの、その、」

「ああ、それなら会長のお父様からの贈り物らしいですよ。」

蒼空先輩が、涼しい顔で言った。…一瞬、俺の表情がかなり大変に人を一人殺せそうな表情になった…気がする。それを見た蓮は、びつくりしたのか恐る恐る俺の顔を覗き込んだ。

「……涼、」

「そうか。」

薄く笑い、蓮の頭に手をのせて、ぽすんと撫でた。そして蓮の表情すら見ずに、踵を返した。

「その糞眼帯、何処行くの？」

「ん？部活。ちよつくら顔だしとく。それから、その呼び方やめてくんねえ？」

「嫌。」

「そうか、そらア残念。」

「いや、其処スルーすんなよ。」

タロ君のツツコミで苦笑し、生徒会室を出る。今は彼の渾身のツツコミでも笑えない。

俺は一人、蓮の表情を最後まで見ないまま、彼女が元通りになるまで雨に打たれようと雷が鳴る屋上に向かった。

…馬鹿だなア、俺って奴ア。

「…あーあ。またやつちやったね。あはは…。」

「…どうしたんです？」

蒼空が蓮の乾いた笑いに尋ねる。大空も太郎も一旦空気をよみ、馬鹿のせいでシリアスターンに突入してしまった事を理解したようだ。二人ともバカな口論をやめ、蓮の方を向いていた。

「涼太はね、お父さんのこと嫌いな。まア…理由は知らないけど、本当に毛嫌いしてるって言うか。」

「成る程、だから椿君にはお菓子を与えなかったのですか。」

蒼空は面白いとも言つように、目をうつすら開けてほほ笑んだ。

その表情には冷たささえ感じられ、都古は一瞬、悪寒を感じた。

そんな空気を区切るように、

「…どうでもいいけどよ…。ヤバい、俺、呼びだしされてんだけど。」

「

生徒会あるのか？」

「至急、来いって言われてんだよ。悪いが鈴木い。」

「いや別に…、」

「じゃ、終わったら行くから。」

二宮はじゃあなー、と相変わらずな無気力に言い捨ててひらひら片手を振った。

「…そう言えば、兄さんがいない間に着替えなきゃ…。」

「えっ？」

「俺も、ちよつと山岳部にお呼ばれしてんだよなー。」

「ええっ？」

「残念ですが僕も、椿君がいない今、会計の資料を持っていかなければならないので。」

「えええっ？」

「あつ、私補習あつたんだ…！…まあどうせ皆居ないし、終わったら帰ってこよう！」

「ええええええええ！？」

太郎が戸惑っている時、都古、大空、蒼空、蓮はじゃあ後でねーと笑いながら手を振って出て行った。

…一人残された太郎は一言。

「…俺もたまには勉強でもするか…。」

全くやる気がないのに、太郎はそう誤魔化し気味に言うと、筆記用具片手に図書室に向かって行った。

「…行っただか、」

誰もいない生徒会室に響く低い声。その声帯の持ち主こそ、先ほどまで騒がれていた釘宮蓮の父・釘宮斜平である。斜平は黒い忍者服で窓から顔をのぞかせ、誰もいない事を確実に悟ってから生徒会室に入りこむ。

斜平は、生徒会室に居たものの全ての都合を調節（またの名を工作）し、全員を生徒会室から出してから入りこんできたのである。目的は、娘である蓮の顔を一目見るため。

「（…立派になったな…、蓮…。）」

斜平は自重気味な笑みを浮かべ、先ほどまで木々の間から雷の音に敏感に反応してしまう感性をなだめながらみた久々の娘を思い浮かべた。お菓子の仕送りなどでは安否や生活の様子で安心しきれず、ヨーロッパから渡ってきたのだ。もちろん密航してきたのだが。

手土産にと、高級品の菓子をまた生徒会長机に置こうと袋の中から菓子を出す。。

…斜平の頭の中には、遠くから見た娘の表情が笑顔である事に安心し、その途端、思いもしない“会いたい”という気持ちが交差していた。

ため息をつく。とんだ大バカ者だと思う。娘一人残して旅だったのに、今更。

「…おじ、さん…？」

斜平がお菓子を置いた刹那、涼太が音もなく入ってきた。斜平はびつくりして涼太を凝視する。入ってきた事にも驚いたが、その白い眼帯と、濡れた髪や制服にも驚いた。以前見た時——随分前の話だが、その時よりも大人びていた。

当の本人は気にする様子もなく、明るい顔でこちらに来了。

「…君は、」

「俺っすよ、涼太。」

「その左目は…、どうしたんだ？」

「……、これは、」

張り付いたような明るい顔がとれそうになった時、涼太はまた明

るく振る舞った。

「中学ん時、ふざけてたら失明しちゃって。ったく、度も超えろと口くなこと無いっすよ？」

「それは手前に捕まれと言ってるんか？」

「あははは、それもいいかも知れせんねっ。」

涼太は冗談交じりに笑った。斜平も笑うが、ふと表情を消し、涼太に尋ねた。

「……君は、手前の事を恨んでいるか？」

涼太の笑いが一瞬止まる。シンとした空気がそこに流れる。涼太は俯いたまま止まっている。斜平がそうだよなと納得しかけた時、涼太が顔を上げた。

「憎んでる？…そんな訳ねエじゃないっすか！」

につこり笑って、穏やかな笑みで。斜平が一瞬ほっとした矢先、涼太は片目しか無い目でこちらを鋭く見た。

「…そんな甘つちよろいもんじゃねエっすよ。」

「…涼太君、」

「本当だったらあんたをぶった切つてるとこだ。けど、蓮がそれを望まねエこともこれア俺の独り善がりだとア知ってます。だから、もう俺の前には現れないでください。」

「………分かった。消える。…だが、最後に…あの子に、蓮に、」

「奴とア合わせねエっすよ。」

涼太は視線を外し、涼しい顔をして外を見た。

「あの時あんたはあいつを一人にしたんだ。今頃父親面するなんて言わせねエっすよ。」

「…そうか…。そうだよ、な…。すまん。じゃあな。」

そう言つと、斜平は生徒会室を後にした。涼太はその刹那、鋭く攻撃的な目で虚空を睨む。右手は爪が食い込むほど握りしめていて、もう一方の左手は椅子をぎりぎりと言う音がするまで握っている。

「……くッそツツツッ！！！！」

涼太はそう叫ぶと、真ん中にあった机を蹴り飛ばした。机は横転し、酷く大きい音が鳴る。それでも構わずに、座っていた椅子をつかみ、床にたたきつけた。バン！！と言う音と共に、椅子のパイプが曲がる。その刹那、涼太はその椅子を踏みつけた。

…荒い吐息だけが生徒会室に響く。食い込む爪から血がにじんだ。肩で息をしながら、涼太は齒ぎしりをして呟く。

「あの野郎…ッ、あの野郎ッ！！！！」

大した大泥棒だ、革命もしくさつてからに！大革命家様の釘宮斜平様には感服するさ、よく似た父娘おやこだなア！だが、父親としては最悪野郎だなア？家庭さえも革命できねエのに、何が革命家だ、何が義賊だッ！！

左目がどうしたって？おめーのせいで怪我したんだよ！恨んでる？当たり前じゃねエか、お前さえいなければ、お前があいつの父親じゃなかったらツツツッ！！！！

「…これは、また。随分と大暴れましたね。」

荒い吐息だけが響くその教室に、凜として透き通った声が聞こえた。戸に寄りかかっている蒼空が涼太は、パイプが折れた机の上に乗りながら、無感情な瞳で彼を見た。

「…あんたには関係ねエツす。」

そう言った涼太に、蒼空はやれやれと言ったように肩をすくめた。…その途端、涼太は自分の行った行為の意味を理解し、はっとして頭を下げた。

「す、すみません。失礼なこと言っちゃって…。」

「構いませんよ。ところで、何があったんです？」

「…何でも無いっす。」

わざと視線を逸らし、外を見た。雷は鳴りやむ勢いは無い。雷が

轟く冷たい陽気に、6月だなんて思えなかった。

…何となく気持ちが落ち着いてきた。

「席…。はずしてもらえますか？」

「了解です。誰も入ってこないようにしますね。」

「……ありがとうございます。」

パタンと言う音を立て、生徒会室のドアが閉まる。涼太はゆっくり、窓の方に歩み寄ると、窓を全開にした。冷たい雨と風が生徒会室に舞う。

バサバサバサバサ…。

生徒会室に置き去りにされた資料が無造作に吹き飛ばされ、生徒会室を雨と共に舞った。涼太の若干長く伸びてきた前髪をかきあげられる。涼太はふと自嘲気味な笑みを浮かべると、スツと力を抜き、目を閉じて壁に寄りかかった。

飛んでけ、飛んでけ。

目を閉じたその先に、

映るその景色を隠すために。

飛んでけ、飛んでけ。

風が舞ったこの部屋に、

映えた彼の涙を隠すために。

…雷が、鳴った。

<・会計視点>； お菓子と紅茶と爆弾とその5（後書き）

自重しなくてごめんなさいイイイイイイイイイイイ！！！！！

かつこ良くなつてない！むしろ自己中！支離滅裂でなにより長え

！！病んでんのはお前だろ的な勢いですねwww

最後のセリフも意味不ですし…。

かなりのキラーパス失礼しました（ノドぐ。）。てか、この後

どうしようもないですよね…。

ではお次の無限の闇先生、深く謝罪の意を申し上げながら、宜しく
お願いしますです。

大空視点 お菓子と紅茶と爆弾とその6（前書き）

…どうも、無限の闇です。

今回は、先に読者の皆さん及び作者の先生方に謝罪を…

ほとんど生徒会に關係ない話にしていまい、申し訳ございませんでした！

しかも、ほとんどのメンバーが登場しない…

正直、自分もこんな話になるなんて…

しかも言葉が支離滅裂過ぎる…

それでは、お菓子と紅茶と爆弾とその6、大空視点。

はじまり、はじまり…

大空視点 お菓子と紅茶と爆弾とその6

「んじゃ、そろそろ戻るかな…」

先程大空は、山岳部に呼ばれ、そして山岳部での用件を済まして少し部員達の作業をボーッと見ていたが、飽きたのだろうか、そう言つて大空は椅子から立ち上がる。

それに気付いた山岳部部长も立ち上がった。

「あ、はい。では、今回もよろしくお願いします」

そう言つて頭を下げる山岳部部长。

「ん、任しとけ」

それに大空は手をヒラヒラさせながら答えた。
そして、そのまま扉まで移動し扉を開けた。

「んじゃあな」

大空がそう言いながら部室を出ようとしたら、

「……………はい！ありがとうございました！……………」

中にいた部員全員が立ち上がり、全員が一斉に頭を下げ、大声でそう言つた。

大空はそれを見て、一瞬ビクツとなったが、無理矢理笑顔を作り、彼らの感謝の言葉に手を上げて答え、そのまま部室を後にした。

いつも思うが、俺が部室を出るときのアレ、マジでやめてほしい…
て言うか、山岳部って部室が狭すぎるだろ…

それに隙間なく部員がいる上にそれが一斉に頭を下げるとか、誰でもビビる。

そう思いながら、俺は少し鼓動が早くなった心臓を落ち着かせながら、生徒会室を目指して歩く。

そういえばあのティーセット、本当に誰の何だろうな…

さつき、もしかしたらと思って山岳部の奴等に聞いて見たが、誰もそんなもの生徒会室に置いてないって言ってたし…

あれ？そう言えばあのティーセットに付いていたマーク、どこかで見たような…！？思い出した！あのティーセット…

と言うことは犯人は、もしかして…

俺があのだティーセットを持ってきた犯人に気付いたと同時に、

「どうも」

「うわ！」

目の前にいきなり生徒会副会長の蒼空が現れ、俺は驚いて反射的にバックステップした。

「そ、蒼空…そう言うの本当に止めてくれ…寿命が縮む…」

「いや、すみません」

蒼空は、俺が言ったことに笑顔で返す。

俺はそれを見て、更に肩を落とす…

しばらくして、蒼空に「今は、生徒会室には行かないでほしい」と頼まれ、俺はそれを簡単に了承した。

生徒会室から怒りと後悔の気を感じたからだ。
そしてその気を発している人間にも気づいた…

俺達は生徒会室から、近からず遠からずの位置にある空き教室に入り、近くにあった机に俺は座り、蒼空は何処からか取り出した折り畳み式のパイプ椅子に座った。

「そう言えば…」

蒼空が椅子に座ったのを見計らって、俺は話を切り出した。
その話とは勿論…

「分かったんだ、ティーセットの犯人」

「ほう、それは本当ですか？」

「ああ」

「その犯人とは？」

「その犯人は…」

俺が犯人の名前を言おうとしたと同時に、

『ピーンポンパンポン→えー、2年。組、久留宮大空、2年。組、久留宮大空、至急職員室に来てください。て言うか、さっさと来い。ピーンポンパンポン→』

と言う放送が流れた。

この放送、流したのはどうやら一人先生のような。

「悪い、何か呼ばれたみたいだ…」

俺は蒼空に申し訳ないという感じで言った。

「いえいえ、お気になさらずに」

「本当にスマン！」

俺はそう言って教室を出た…

大空が職員室に入ると、一人が来賓室の扉の前に立っていた。

一人は、大空が入って来たのを見て、来賓室の扉開け、中に入った。

大空も急いで来賓室の扉の前に行き、扉を開け、中に入った。

中には、一人以外に2人の人がソファーに座っていた。

1人は腰まである長い茶髪の大学生位の女性と、もう1人は、肩ぐらいまである黒髪の中学生位の少女だった。

その2人は大空にとって、とても見覚えのある人達だった。

「亜沙美姉さんに花菜…^{あさみ}^{かな}やっぱりか…」

その2人は、大空の姉と妹だった。

姉の名は、久留宮^{くるみや} 亜沙美^{あさみ}。20歳。大学生2年生。

妹の名は、久留宮^{くるみや} 花菜^{かな}。15歳。中学3年生。

2人は、大空の姿を確認すると、立ち上がって近づいてきた。

「こんにちは、カイくん」

「……」

姉の亜沙美は笑顔でそう言い、妹の花菜は無言、無表情で亜沙美についてきた。

ちなみに、亜沙美が言ったカイとは、大空のあだ名で大空↓空↓スカイ↓カイと言いついかにも安易な考えで「作者さん…?」…失礼、とても素晴らしい考えで決められ、亜沙美は大空を呼ぶ時はいつもこのあだ名で呼んでいる。

「2人共、やっぱり来てたんだな…あのティーセット、姉さんだろ?」

「ええ、そうよ」

大空の言ったことにニコニコ顔でそう答える亜沙美。

どうやら、あのティーセットは亜沙美が用意したもののようなだ。

「いつもカイくんがお世話になっているから、そのお礼にと思って…」

大空は常日頃から生徒会での話をしていた。

その話を聞いた亜沙美は、いつも弟がお世話になっているお礼に自分のお気に入りティーセットと同じメーカーのティーセットを買い、更には自分で作った紅茶を用意してそれを持ってきた、これがティーセット事件の真実だ！（キリッ

「でも、それだけって訳じゃなさそうだな…」

「さすがカイくん、鋭い」

そう言ってパチパチと拍手する亜沙美。

「で、他の用事って?」

「それがね、花菜ちゃんが…」

そう言っただけで花菜の方を見る亜沙美。

「……」

花菜は無言で亜沙美より一歩前に出て大空の顔をジッと見上げている。

「どうしたんだ?花菜?」

そんな花菜を不思議に思っただけで亜空は聞いた。

「……」

しかし、花菜は無言で大空の顔を見上げるだけだ。

「?」

大空が頭にはてなマークを浮かべている時、

「……グスッ」

「!?!」

突然、花菜の目に涙が…

「ど、ど、どうした！？花菜！？」

その姿を見て、あたふたする大空。

「もう、駄目でしょ！カイくん。花菜ちゃん泣かせちゃ…」

「ええ！？」

花菜の頭を撫でる亜沙美にそう言われ、更に困惑する大空。

「ほら、花菜ちゃん。カイくんに言いたいことがあるんでしょ？」

「……コクッ」

亜沙美に言われたことに花菜は頷いた。

「な、何だ？言いたい事って？」

「…お買い物」

「お買い物？お買い物…ああ！思い出した！そう言えば今日、買い物と一緒に行く約束してたんだ…」

大空は全て思い出した。

今朝、大空は花菜に買い物に誘われ、大空はそれを承諾し今日は早く帰ってくるように言われていた。

花菜にとっては、初めて兄を買い物に誘ったということでも楽しみにしていた。

「…やっぱり忘れてたんだ」

そう言ってしょんぼりする花菜。

「う、ごめん…」

そんな花菜を見て大空は申し訳ない気持ちで一杯になった。

「はあ、しょうがないな」

そんな2人を見かねた亜沙美が2人の間に入った。
そして、

「それっ！」

「うお！」

「きゃっ！」

2人の腕を掴み、2人を引き寄せた。

「はい、カイくん。何か言うことは？」

「ごめんな、花菜…」

亜沙美に言われ、大空はもう一度しっかり花菜に謝った。

「…うつん」

花菜は大空の言葉にそう言った。

「はい！それじゃ今からお買い物に行きましょう！」

「おう！」

「…うん！」

そして、3人は来賓室を出た。

「え」と…俺も戻るか…」

取り残された一人の聲が来賓室に響き渡った…

大空視点 お菓子と紅茶と爆弾とその6（後書き）

次はお茶先生。 よろしくお願いします。

<顧問視点> お菓子と紅茶と爆弾とその7（前書き）

どうも、お茶です

遅くなつてすみませんm（――）m

あと、意味も無くどうでもいい話入れてすみません。

そのくせ、短くてすみません。貫徹の頭じゃあこれが限界でした

< 顧問視点 > お菓子と紅茶と爆弾とその7

事件は無事解決。

ティーセットの犯人は久留宮姉妹で、その原因となった久留宮大空は先ほど久留宮姉妹と共に下校した。

俺は今、生徒会室に戻る途中である。

生徒会室に戻って誰かしら居れば、先のことを説明するし、居なければ居ないでお菓子でも食べるつもりだ。

P i r r r . . .

「……ん？」

電話、いや、メールか。

廊下に響く着信音に少し焦って、ポケットからケータイを取り出す。

画面を見ると「新着通知ありEメール1件」の文字

ロックを外して、メールを開く。

f r o m : 風真

s b : (n o n t i t l e)

- - - - -

来月の第一土曜

正午、駅前通りの喫茶店で

- - - - -

簡素な内容。

たった2行の、必要な事しか記されていない、なんの面白みもない文面。

そんなメールにあいつらしさを感じてか、足が重くなる。

今度は何を言われるんだか……。わざわざ会うつてことは、また面倒なことを押し付けるつもりか

P i r r r . . .

再び振動するケータイ。

今度は何だ。気が変わったか？それとも何かの変更か？

カチカチと少し、先ほどよりもちよつとだけ乱暴にボタンを押してメールを開く

f r o m : 松本

s b : わけわからん

- - - - -

よっ！元気してるか？

俺は元気は元気だが、やばい。

あれ、前言っただろ？俺の弟分の話

あいつ誘拐されちまつたんだとよ

詳細はわかんねーけど、心配だから俺も探しに行くことにした。

またしばらくメール出来ねえかも

遥か遠くの親友様より

- - - - -

……相変わらず大変そうだ。

適当に労わりの言葉をいれつつ返信する。

カチカチ。ペタペタ。

そーいや、雨上がってるな。

ざあざあとリズムのいい、眠気を誘うようなBGMのかわりに、運動部の声がいよいよのやいのと聞こえてくる。

カチカチ。ペタペタ。カツカツ。

「明日は暑くなりそうだな」

「そうですね」

ペタペタ。カツカツ。

「にしても、お菓子についでた火薬の匂いつて何だったんだろうな」
「さあ？近くにあったからうつったんじゃないですかね。僕には分かりかねます」

ペタペタ。カツカツ。

「で、どこから聞いてた？」

「いつも弟がお世話になってます、からですかねえ」

「久留宮が来る前からじゃねえか」

いつの間にか、後ろから隣に移動した（俺より6センチも高い）真崎を見上げる。

「ところで二宮先生、これから生徒会室に戻るつもりですか？」

「ああ。それがどうかしたか？」

「いえ、その、」

珍しく口ごもる真崎。

え、本当にどうしたよ？火薬が発火したか？

「……」ご愁傷さまです

それだけ言つと、真崎は足を止めて、今来た道に戻っていった。

「はあ？」

よく分からんが……まあ、いいか。

かなり気になるがあまり気にせずにようと思う。

そして、着く生徒会室。と、大惨事

……Why?

おっと、驚きすぎてつい慣れない英語が。

とりあえず、一言、いいか？

「俺のお菓子……っ!」

そっちかよ!?

鈴木らしきツツコミの空耳が青い空に響いて消えた。

おわり。

<顧問視点> お菓子と紅茶と爆弾とその7（後書き）

色々とし訳ない>（――）<

次から本気出す。いや、もう本気だしてるんですけど^^; 蒼空くんの「ご愁傷様」は部屋の惨事についてですよ？一応以上、お菓子も紅茶も爆弾も関係ない話でした。……すみません

&l t・会長視点&g t； 現代っ子な生徒会（前書き）

どうも、M r・あいうです。

夏といえば暑い！

そんなイメージしかわかなかった残念な想像力で書き上げた作品です。

よろしければどうぞ。

7月。

今年の梅雨もようやく終わりを告げ、まるで昨日までの雨が嘘だったかのように照りつける日の光。

快適というには若干暑すぎるこの日和にも、桜町第一高校はその動きを止めない。

それもそのはず、この海沿いの私立高校最大の売りはかなり行き過ぎている感もある部活への大幅なバックアップである。

なにせ全部室にエアコンが完備されているうえ、地球に厳しいまさかの18 設定OKだ。

しかも運動部には惜しみないスポーツドリンクが配布される。

そんな現代っ子万歳なこの学校にも、唯一快適ではない空間が残念ながら存在していた。

しかしそれはむしろ、自業自得というべきなのだが。

「生徒会長ただいま参上！」

と、そんな名乗りを上げながら私は生徒会室に入った。

これは私が恥ずかしいやつだからではなく、おそらく暑さでうだつているであろう他のメンバーに対するちょっとしたエールでもあったのだが。

結果、私は少し恥ずかしいやつとなってしまうた。

「ああ、どうも会長。お元気そうで何よりです」

このくそ暑い中湯気が立っている紅茶のカップを片手によく通る美声で私を迎えてくれたのは副会長の真崎 蒼空君。
私のよき理解者でありこの生徒会一優秀な人材だ。

「……………暑い、というか熱い、あ、会長何でやねん」

おそらく温度計があつたら30度の大台に乗るという中でも自分の立ち位置を忘れずに律義に突っ込みを入れてくれているのは書記の鈴木 太郎君。

普通に來ていた。

以上、生徒会室のメンバー。

「あれっ！なんか足りないと思うよ!？」

何故か生徒会室には二人しかいなかった。

くそう、なんかさっきの掛け声が無性に恥ずかしい。
ツツコミが弱いというのもそれはそれで嫌なものだ。

「ああ、そういうえば会長。生徒会の他のメンバーからの伝言です。

楠木さんは生徒会を一瞥するなり『暑い、無理』だそうで、椿君は『……………ちよつと俺エアコン完備の剣道部てんごくいつてくるんで、蓮にそう言つといてくださいッス』といって、二宮先生は『うわっ、暑……………そーいや、職員会議あつたわ。じゃ』そして大空君は『……………登山部に顔出してくる』だそうです」

超高級紅茶セットという手土産の効果で見事生徒会準メンバーの地位を獲得した(私の一存での決定の為、現在職員室に許可要請中の)一名含め全員の声帯模写を完璧にこなすという特技を披露した真崎

君。

というか全員暑さでダウンって…………

「なんか、私のせい？」

「ええ、おそらくは」

実際この生徒会室がエアコン禁止なのにはすごく納得できるわけがある。

というのも五月の頭頃ようやく生徒会が始動するといったその時期に私は生徒会をもっと生徒にオープンな空間にしたいといった名目でドアを蹴破ったのだ（理由後付け）。

そのため室内は直接廊下とつながっており、エアコンをつけても涼しい空気が全部廊下に逃げてしまうのだ。

いくらエコロジーという言葉を知らないのかという勢いのこの高校でも、校舎全体を18度に設定するお金はない。ということで生徒会室にはエアコン禁止令が出されていたのだ。

というわけで、生徒会のメンバーも逃げていく結果となったのだが。なんか、すごく納得がいかない。

「……………真崎君、全員の電話番号知ってる？」

「ええ、調べればわかりますけど、どうしました？」

「私はたるんできてると思うんだよね！仮にも生徒の代表として選ばれた生徒会メンバーが暑さを理由に生徒会室にも来ないなんてたるんでるよ！そもそも生徒会というものは……………以下略……………何で私だけ暑い思いをしなきゃならないの！」

「ていうか、最終的に愚痴じゃないですか……………」

私の素晴らしい演説を一言でまとめてくれやがった鈴木君は置いておいて私はこう高らかに宣言した。

「緊急招集よ！桜町第一高校生徒会からは決して逃げられないことを教えてやるんだからっ！」

それに皆と一緒に居たいしね、と心の中でまとめて、うだるような暑さの中、道ずれを求めて生徒会が始動した。

<会長視点> 現代っ子な生徒会（後書き）

次は十六夜神月さん。
よろしく願います。

< 副会長視点 > 現代っ子な生徒会その2（前書き）

三回目が回って来た十六夜です。

もう、なんか自分の文才の無さに泣きそうです（冗談です）

まあ、文才が他の人より無いのは事実ですが。

そんな僕が書いたこの回ですが、暇潰しにでもなれば幸いです。

さあ、会長から緊急招集命令が出ましたね。

「桜町第一高校生徒会からは逃げられない」

ですか、ちょっと怖いですね…

「まあ、とりあえず、ちょっと待ってください」

僕はそう言つと、自分の鞆からノートパソコンを取り出す。

「ちよっ！？なんで鞆にパソコン入ってるんだよ！？」

よっぼど意外だったのか、暑いのに全力で突っ込んでくる鈴木君

「え？必需品ですが、なにか？」

「ちげえだろ！？」

「ちなみに、デスクトップも入ってますが…」

「なんでだよ！？どこに入ってるんだよ！？」

「いえ、ですから鞆…」

「何故だあああああああ！！」

そして、暑さからかいつもより早めに力尽きた。

「面白いですねえ」

ちなみに、デスクトップは本当に入っている。

他にも色々入っているが、それは今は秘密である。

「えーと」

『カタカタカタカタカタ』

「おおー、指が別の生き物みたいだよ!!」

「ありがとうございます」

「画面は変な数字とかアルファベットの羅列で分らないけど」

「普通は分らないと思います」

「むうー」

何故か会長はご不満なようだった。

そんな感じでしばらくパソコンを操作して、

「はい会長、今日来てない人たちの電話番号です」

そう言ってパソコンを会長に見せると同時に、

「なんでだよ!?!なんで電話番号そんな方法で分かるんだよ!?!」

鈴木君復活である。

「これからも普通でいたいなら、知らないほうがいいかと…」

「あ、じゃあいいです、はい」

何故か真っ青になる鈴木君。

鈴木君の中で僕は一体どんな印象なんでしょう。

「うん、それじゃあ、私は涼太に電話するから、

真崎副会長は楠木書記に、鈴木書記は残り2人ね」

「分かりました」

「了解…」

すっかりげっそりしてしまった鈴木君である。

そして、それぞれが携帯電話を取り出して電話を始める。

僕も電話をかけることにしよう、

『もしもし』

「っ！？」

凄いですよあの子、1コールもしないうちから出ましたよ、

なにあれ、電話がかかってくるのが分かってたかのような。

というか、分かっていないとあのタイミングで出るの無理でしょう。

しかも、知らない電話番号からの電話によく出ましたね…

『もしもし?』

「あ、すみません、真崎です」

『何か用?というか、何で私の電話番号知ってるの?』

「それは秘密」

『…まあいいわ、それで、何か用?』

「会長が呼びですよ」

『どこに?』

「生徒会室以外あるのでしょうか?」

『嫌だ』

「何故?」

『暑いから』

「会長と副会長からの呼び出しです、来なさい」

『嫌だ』

「駄目です」

『嫌だ』

「駄目です」

『嫌』

「駄目です」

『嫌』

「駄目です」

『い——』

「駄目です」

『……』

「来る気になりましたか？」

『…嫌だ』

「はあ、分かりました。桜町第一高校生徒会からは逃げられない」

『え？』

「会長の言葉です。逃げられないと言つ事を見せてあげましょう」

『え、ちょ——』

『P.i』

「お、真崎副会長、電話終わった？」

「ええ、“電話”は終わりました」

「?とりあえず、涼太は呼び出したし、鈴木君も順調みたいだけど」

「そうですか、僕は申し訳ないですが、少々出かけてきます」

「え?出かけるって、どこに?」

「楠木さんを連れに」

「あ、なるほど…ってええ!?!どこから行くつもり!?!」

「おーい、電話終わった…って何してんだお前!?!」

「何って、窓から飛び降りようとしているのですか?」

「いやいや、窓から飛び降りる意味がわからねえよ!?!」

「ですから、楠木さんを連れに」

「普通に歩いていけよ!?!」

「いえ、気配的にこちらから行ったほうが早いですが、

それに、回り道はめんどくさいですから」

「いや、窓からとか無理に――」

「それでは」

『ひょい』

あまりに軽い感じで窓から飛び降りた蒼空であった。

そして、残された二人は。

「ああああああ！　なんか普通に飛び降りた！？」

ちよ、つてかもういねえ！？」

「え、どうするのこれ？」

どうするんでしょう。

&l t・副会長視点&g t； 現代っ子な生徒会その2（後書き）

次は時計堂先生です。

よろしく願いします。

さて、謝罪だー

< 鈴木書記視点 > 現代っ子な生徒会その3（前書き）

こたつ が あらわれない！

そんな家に住んでいます。どうも、時計堂です。

寒い中、熱い話を書くのは変な気分になりました。

いつも通りの駄文ですが、おおらかな気分で見てください。嬉
しいです。

< 鈴木書記視点 > 現代っ子な生徒会その3

普通に飛び降り、平然と歩き出す真崎を見て思わずため息をつく。とりあえずは、人間ミートソースなどは見ずに済んだようだ。それにしても、窓から飛び降りる方が楽だという結論を導き出す奴の脳は不良品とは思えない。いや、俺ときには理解できない、はかり知れない計算があるのか？

「……やめよう」

第一志望は小市民。平凡平和が看板の俺が、踏みこんで良い領域ではない気がする。

会長が細い顎に手を当て、小さく唸る。その様子も、美少女ならではの美しさがあふれ出て……と評価しかけたところでパツと顔を上げ、閃いたと言わんばかりに軽快に指を鳴らした。

「よし！ みんなの体を鍛えよう！」

「は？」

その爽快感あふれる思いつきに、思わず間抜けに返してしまう。嫌な予感、きつと外れていない。

「そりやまたどうして」

「窓から飛び降りれるように」

「どこの集団自殺だ！」

輝く瞳からは、冗談の文字は欠片も見つからない。……こやつ、本気だ。背中を一筋の、冷たい物が流れる。全校生徒の移動が、窓からの飛び降り……一種の怪奇現象じゃねえか。

しかし、会長の方は一番の考えだと言わんばかりに何度もうなずいていた。

「確かに楽だし、移動も早いし、勉強のための体力を温存できるよ」

「それ以前に命を温存したい！」

「鈴木書記、体力作りと言えは何か？」

「へっ？ ええと……」

いきなり真面目に返してくる。突飛な目的のための質問でも、真剣に考えてしまう俺って偉い。今度はこっちが顎に手を当て、唸る番だった。

今まで俺が実践してきたのは、あまり一般的じゃあないよな……。ここは妥当に、マラソンとか？ それとも、球技大会とか。いやいや、海の近くだし、それを利用した方がいいかもしれない。釣り……は体力使わないから、水泳でどうだろう。水泳には今はちよつと早い気がするが、寒中水泳なるDMな競技も存在する。その線で行こう。うん、それがいい！

「それじゃっ！ 私はみんなにこの素晴らしい計画を伝えてくるよ！」

「俺的には水泳……って行くんかい！ ちょ、それって俺の意見聞いた意味あるのか……って、行っちゃったよ」

軽いタイフーンを巻き起こしつつ、しゅたつと手を上げて教室を飛び出していく様子は野生の兎にも見える。目の前に残されたのは水滴のついた空っぽのティーカップ。熱風がひと吹きして、机の上の書類が一枚だけ宙に舞った。

清々しいというより熱々しい青空の下、どこからか「気合いだ——！」と叫んでいる運動部の声が聞こえた。

額を流れる汗をぬぐい、手を太陽にかざしてそつと目を細める。思わず、ため息が出た。

……皆さん、元気がよろしいようで。

< 鈴木書記視点 > 現代っ子な生徒会その3（後書き）

つなぎを生かしきれなかったっ……。

お次は椎名さんです。下手なつなぎですみませんが、よろしくお願ひします。

<楠木書記視点> 現代っ子な生徒会その4（前書き）

どうも三順目の椎名です！

うう・・・。

またも文が大変なことに・・・っ。

どうか、見放さずに温かい目で見守ってやってください。

『姐さんっ！今日、道場に来ないって本当ですか？』

耳元で聞こえる大声に、あたしは眉をひそめた。

「声が大きい。あたしの鼓膜を破る気？」

『そ、そんなつもりはないです！すみません！』

あたしの一言に、電話の向こうのヤツが頭を下げる光景が、いとも簡単に浮かんだ。

ひよしふうま
日吉風馬。

あたしと同じ道場に通う、チビ男だ。

チビのくせに、何故かバスケット部のエースだったりするから、世の中は不思議だ。

ちなみに、学年はあたしのひとつ上、三年生。

バスケットで有名な大学へのスポーツ推薦が決まっているらしい。

『あ！それより、そうです姐さん！何で来ないんですか！？』

風馬の質問に、あたしは窓の外を見やった。

じりじり。

そんな効果音がぴったりだ。

「・・・暑いから。こんな時に暑苦しく空手なんかやってられないわよ」

『そんなあっ！来てくださいよぉ・・・！』

「嫌」

半泣きの風馬に、あたしは無碍も無く断固拒否する。

男のくせに、泣き虫だなんてありえない。

心の中でため息をつきながら、あたしはもう一度はつきりと言ってやった。

「今日はなにがあっても行かないから」

『姐さ・・・』

プツ。

風馬の言葉も最後まで聞かずに、電話を切る。
ふう。

「誰がこんな暑い日に、むさくるしい道場に行くかっての」
一人ごちて、舌を突き出した瞬間、携帯電話がピカリと光った。
オレンジのライト。

着信だ。

また風馬かと思い、半ばげんなりとした気持ちで通話ボタンを押した。

「もしもし」

『っ!?!』

驚いたように息を呑む音。

あれ、風馬じゃないのかしら?

「もしもし?」

『あ、すいません、真崎です』

一呼吸置いて、返事が返ってきた。

マサキ……。

一瞬考え込んでしまう。

ああ、あの副会長ね。

苗字だと分からなかった。

「何か用?というか、何で私の電話番号知ってるの?」

『それは秘密』

「……まあいいわ、それで、何か用?」

『会長がお呼びですよ』

「どこに?」

『生徒会室以外あるのでしょうか?』

「嫌だ」

『何故?』

「暑いから」

『会長と副会長からの呼び出しです、来なさい』
「嫌だ」

『駄目です』

「嫌だ」

その間約30秒。

副会長さんは、平行の一途をたどる押し問答を繰り返した後、決心したように何やら不穏なことを告げると、一方的に電話を切った。一体なんだって言うのよ……？

「……………」

「こんにちは、楠木さん」

玄関から響いてきたベル音に、呼び寄せられたあたしに蒼空は爽やかな微笑を浮かべた。

「……早かったわね」

「まあ、窓から飛び降りましたからね」

「ふうん。あつそ」

太郎はさぞかし喚いたことでしょうね。

「で、聞くまでも無いけど。用件は？」

ため息混じりに尋ねる。

「生徒会室に行きましょう」

「でしょうね。……でも生憎、あたしエアコンの無い部屋には行かない主義なの」

「なんて地球に優しくない主義なんですか……」

「大体、ドアを壊したのは会長さんでしょう？来て欲しいなら、責任とって修理してから出直してきなさい、って伝えてもらえるかしら？」

「それは、直談判でお願いします」

涼しい顔で言つてのける蒼空に、ぴくりとこめかみが疼いた。

「あのね。だから……きゃああつ！？」

いい加減追い出してやろうかと思ったその時、体がふわりと浮かん

だ。

な、なに・・・！

気づけば、あたしは蒼空の肩に担がれていた。

「こら！離さない！」

無意味だと本能で直感しつつも、じたばたともがいてみる。

ま、やっぱり無意味なんだけど。

身長150のあたしが、180はいつてるであろうこいつに、体格で敵うわけは、ないんです。

「最後はやはり実力行使ですよね」

いらいらと憤慨するあたしに。

またも、涼しい顔で彼は言ったのである。

蒸し暑い部屋に半ば無理矢理連れて来られたあたしは、椅子の上で脚を組んで座った。

「このあたしの意見を無視してまで、連れてきたんだもの。さぞかし、重要な用件があったんでしょうね？」

ないとは言わせない。

そんな脅しをたつぷりと含んだ声色で、あたしは低く呟いた。

こういう時のあたしのバックには、氷の息を吐く虎が牙をむいてる
！・・・。

なんて事を風馬に言われたことがある。

「う、うん？・・・勿論あるよ？重要な・・・」

「まさか、自分だけが暑い思いをするなんて許せない、なーんていう理由だったら・・・飛ばすわよ？」

あえて、どこにどうやって、とは言わない。

しかも、あたしは暑いのが嫌で帰ったというなんとも矛盾したことについて、一切触れない。

図星だったのか、会長はにこりと笑顔のまま凍ってしまった。

「俺、楠木がいればエアコンはいらない気がする」

「タロ君、同感。・・・俺には目の前に雪女が見える」

ぼそぼそ話す二人をあたしは一睨み。

「犬と眼帯はお黙んなさい」

「はい」

「つたく！」

これでしょうもない理由だったりした日には、真面目にはっ倒すんだからね・・・。

&l t・楠木書記視点&g t; 現代っ子な生徒会その4（後書き）

ああああ。

なんかもう自分の文才の無さに軽く落ち込み気味です。

しかも、キラーパス。

汐嵐さん、すみません。

計画も何もありません……。

<会計視点> 現代っ子な生徒会その5（前書き）

三周目来ました。汐嵐です。

前回は自重しない話を申し訳御座いません…っ（泣）と思いつつ書いた所存です。

では、現代っ子な生徒会、会計視点。どうぞお楽しみください。

とりあえず、何だか機嫌の悪い都古は置いておいて、一応な会議が始まる。

「えー、おほん。これから会議を始めるわけだけでも！そもそもこの生徒会室だけエアコン禁止令が出されているのは不公平だと私は思う。」

「貴女が蹴破ったんでしょ。」

呆れ気味に呟く都古のバックに見えるのは冷氣漂う虎の化身。舌打ちをしながらも、蒼空先輩に貸してもらった——訂正しよう、蒼空先輩から強奪したであろう扇子を扇ぎながら涼んでいる。

「まあ、それは良いとして。」

「良くないわよ……。」

「私は思ったの！平等にこの過酷な暑さに耐えるべきなんじゃないかって！そもそも、地球温暖化が巻き起こした世界各地の気温上昇やら水質汚染やら、何で都市部にいる人は被害がなくて貧困に困ってる人が被害があるのか私は不公平だと思う！痛みって言うのは、分かち合うからこそ平等でしょ！？たとえ剣道部とか山岳部にエアコンがあっても、生徒会にはないよ！それがおかしいと思う！だいたい、」

「はいはいはい。つまり何だア、おめーは暑さを共有するために、体育祭まがいのことか遠足みてーな事をやりたいわけ。」

俺は蓮の言いたいだろう事を言い放った。いい加減放置は体に悪いので、早く部室に戻って休みたい。

蓮は目をキラキラ光らせ、

「つまりそう言う事！」

と俺を指差した。

「待て！んな事なら、最初からかいつまんで話せ！つか椿、良くわかったな！」

「長い付き合いだからなア……」

「イヤイヤイヤ今のはどう発展させても遠足には繋がらない！」

繋がらないのか、繋がるだろ。普通にそう言ったら、タロ君は頭を抱えてしまった。何か悪い事したか、俺。

「まあ椿君のいつもの天然は置いておきましょう。」

「蒼空先輩、酷いっす。ふざけてなんかねエのに。」

「椿君の発言はスルーが一番、と野明君が言っていましたから。で？遠足と言っつのは何を？」

あんのくそ部長……と思いながら、一応乾いた笑いをもらす。野明とは、剣道部の破天荒バ……じゃない、とてもお強い部長である。

蒼空先輩がそう尋ねると、蓮がそれだよ！と笑った。

「学校内全生徒を集めて遠足にいくんだっ！そのためには場所を決めなきゃ！」

「そんな事言っただって……、何やんだよ？」

「ふっふっふっ……。良くぞ聞きました久留宮先輩！それはね！」

蓮がビシッ！と虚空を指差し、ポーズらしきものをつた。嫌な予感がする、じゃない。嫌な予感しかしない。

「クラス対抗、学年対抗、部活対抗鬼ごっこだよ！」

かくれんぼでも、それに通づるものなら可！

そんな事無邪気な顔で言われても恐ろしいだけなんだが。

「はあ？！」

「でも、鬼ごっこなどなら校内でもいいのでは……？」

「甘いね真崎副会長！校内になると、学校って言う逃げ場があるじゃないか！それに、私は思いつきり暑いところに行きたいんだよ！」

「それこそ理不尽だろ！つか、」

「では！場所を決めていこうじゃないか！」

つつこもうとしたタロ君を渾身のスルー。この馬鹿げた会議はいつまで続くんだろう……。てか

「部活対抗……」

俺の地獄から聞こえたような呟きは、いつもの如く理不尽な予算を会計の俺に押し付けるのだろう蓮の宣言に打ち消されたのだった。

<・会計視点>; 現代っ子な生徒会その5（後書き）

勝手に向こうでやること決めちゃいました。そして駄文。キラークラス。

私、なんなんでしょう。何者なんでしょう。あ、バカですね。ごめんなさい。

ではお次の無限の闇先生、お願いします。

<大空視点> 現代っ子な生徒会その6（前書き）

どうも、無限の闇です。

今回は少し短めにしてみました。

それでは、現代っ子な生徒会その6、大空視点、始まり、始まり…

<大空視点>：現代っ子な生徒会その6

「クラス対抗、学年対抗、部活対抗鬼ごっこだよ！」

どれか1つに絞れよ。

何て思ってしまう今日この頃…

何時ものように会長さんの突拍子もないことに半分驚愕し、もう半分で期待をしまっている自分に気づき、薄く笑う。

鬼ごっこか…

懐かしいな…

最後にやったのいつ頃だろうか…

何て考えていると…

「では！場所を決めていこうじゃないか！」

と、元気ハツラツ！オ。ナミンC！な会長が言った。

うん、今の例えは無いな、自分で言うのもなんだが…

しかし、場所か…

「浜辺なんてどうでしょう？海もエリアにしたら、尚よろしいかと…」

涼しい顔でそんなことを言う、蒼空。

その蒼空が言ったことを書記である太郎が黒板に書いている。

ちなみに、もう1人の書記である都古は、蒼空から借りた、もとい強奪した扇子で扇ぎながら、暑い暑いと呟いている。

あんなにおいし…涼しそうな熊が後ろにいるのになんで暑いのだろ
うか？

「そんなの全っ然！暑くないよ！もつと暑いとこじゃなくちゃ！」

しかし会長さんは、蒼空の提案をバツサリ斬ってしまった。
黒板に書いてある『浜辺＋海』という字に×をつける太郎。

「そうですか…」

あからさまに、肩をすくめて残念と言った感じの表情をする蒼空。
しかし、海が駄目となると…
後はあそこしかないよな…

「じゃあ、山なんてどうだ？」

俺が提案したのはもちろん、山。
て言うかこれしか思い浮かばねーよ。

「山で鬼ごっことか殺す気か！」

俺の言ったことに太郎がいちゃもんをつけてくるが無視する俺達。

「うーん、山か。でも山って意外と涼しい気がするんだけど…」

「ええ、まあ、確かに…」

「いや、この時期ならなかなかの暑さだと思う。ただ、あまり高く
登りすぎると気温が一気に下がるから気をつけてくれ」

お兄さんとの約束だぞ

「そっか、じゃあよし！山に決定！」

そう高らかに言う会長さん。

「だから山で鬼ごっことか殺す気…」

「それじゃあそれぞれ準備に取りかかって。久留宮先輩は山岳部に協力してもらえるか交渉に」

「おう」

「先生と涼太は学校側に私と予算の交渉に」

「はいはい」

「ん」

「他の人達も出来る限りの事をしてね！」

「分かりました」

「分かったわ」

「それじゃあ、解散！」

そう言っただけで疾風の如く速さで生徒会室を出る会長さん。

「おい！ちょっと待てよ！」

会長さん走って追いかけていく涼太。

「あゝあ、面倒くせゝ」

2人をのんびり歩きながら追いかけていく一人先生。

「これでゆつくり休めるわ…」

「ちゃんと仕事してくださいね」

「分かってるわよ…」

何てやり取りをしながら都古と蒼空も出ていった。

「俺も行くか…」

そう言つて椅子から立ち上がった時、

「ん？」

「…どうせ俺なんて…ブツブツ」

隅の方に蹲つてボソボソ何かを言っている太郎を見つけた。

しかし、俺は無視して生徒会室を出た。

少しして、俺が廊下を歩いていると、「いつの間にか誰もいなくなつてるー！？！？」と言つ声が生徒会室の辺りから聞こえた気がするが、きつと気のせいだろう。

&l t・大空視点&g t； 現代つ子な生徒会その6（後書き）

それでは、お茶先生、よろしくお願いします。

<顧問視点> 現代っ子な生徒会その7（前書き）

どうも、お茶です

遅れてすみません。言い訳するなら「受験生ですから」

言い訳になってないとかそういう言葉は聞かないよ」

今更ですけど、顧問の本名は「二宮一人」です。「ひとり」じゃなくて「かずと」。本文中に書いてなかったので、一応。

あと、今回ほとんど他キャラが出てません。自キャラばかりですみません。話もほとんど進んでないです^^;

<顧問視点> 現代っ子な生徒会その7

「先生と涼太は学園側に私と予算の交渉に」

職員会議を終えて、アイスコーヒーを飲みながらとなしにケータイを覗くと着信が入っていた。

聞くと鈴木からのようだったが、あいつに俺の番号を教えた覚えは無い。いや、まあ、内容聞く限り生徒会関係のようだから、情報元は真崎だろう。確実に。

で、冒頭の台詞は、呼び出しくらった俺が「嫌々」向かった「暑苦しい」生徒会室に足を踏み入れた時に言われたものである。

つか、職員室に向かうんだったら態々呼び出すなよ。無駄に暑い思いしたじゃねえか。

で、俺は問題児どもと職員室に逆戻りしたんだが……俺、いらなくね？

釘宮は早口で教頭にまくし立てているし、椿はその釘宮の後ろで教頭にプレッシャーをかけている。頬を引きつらせている（生え際やば目な）教頭には同情を覚える。が、多分3分しない内に忘れるだろう。人間の記憶能力には限界があるもんだし、ここは諦めてさっさと成仏してもらいたい。南無。

ちらりと視界の端に映った時計に目をやる。あ、やばいな。

「新田先生」

丁度、暇そうな人がいたので声をかける。

にっとうもひさ

新田智久先生、理科の先生で生徒たちには結構人気があるらしい。爽やかな笑顔がかなり印象的だ。家で魚を飼っていて、よくそのことで話したりする。チャームポイントはえくぼ。

「ん、なんだい？二宮先生」

「いや、ね。もう上がるからさ、あいつらにこれ、渡しといてくれないか」

いまだ教頭と話してる（いや、釘宮からの一方通行みたいだが）生徒会役員二名を横目で目線をやり、一枚のメモを渡す。新田先生はそこに書かれた短く、とても分かりやすい内容（つまり、「帰る」の一言なんだが）を見て苦笑する。

「あいよ。しかしまあ、他にもつと書くことはないのかねえ。いくらなんでもこりゃ簡潔すぎるだろ」

「俺もそう思う。でも、急ぎなんだよ」

「ああ、そうか。そういう待ち合わせがあるって……あれ？明日じゃなかったのか？」

昨日の昼食中にした他愛無い会話の内容を覚えてるとは、存外記憶力も良いらしい。

「今朝方連絡が入ってな、用事が出来たとかで変更になった。ったく、こっちの予定も聞きやしねえ」

「はは、どうせ大した予定も無いんだからいいじゃないか」

む、そらどついう意味だ？

まるで俺が暇人であるかのようなことを言ってくれる新田先生をジト目で見てみるが、爽やかスマイルでガードされる。

「ほら、急ぎなんだろう？デートの時間に遅れちゃまずいんじゃないか？」

いつの間にかにやにや笑いに切り換えた新田先生が時計を指差す。
こいつ……相手が男だつて分かつてるくせに言つてやがる……
デートという言葉に正面の席の国語教師、相沢綾香先生が小テストの用紙から顔を上げた。

「え。二宮先生、彼女がいるんですか？」

ぱちくりと、驚いたように聞いてくる相沢先生。いや、これは本当に意外だと思つて顔。
俺のことをどういう風に思っているのか、是非とも聞いてみたいものだ。

「いや、ただの……幼馴染ですよ」

幼馴染というよりは腐れ縁だが。
そう、なんですか。と、若干納得してなさそうな相沢先生をよそに、ささつと多くも無い荷物を纏めて鞆を持つ。

「じゃ、言つてくらあ」

「おう。精々遅刻して怒られないようにな」

余計なお世話だっ

けどまあ、あいつは時間に煩い。とまではいかないものの、遅れたりしたら機嫌が悪くなることは分かりきっているので、片手をあげ、早足でその場を去る。

時間まであと15分。スクーターに乗っていけば、5分前にはなん

とか着きそうだ。

「にしても、暑いな」

フルフェイスのヘルメットを被り、冷房が利いているだろう喫茶店を思いながらアスファルトの上を俺は走って行った。

校舎で恨めしそうに見つめる視線にも気づかないで……。

<顧問視点> 現代っ子な生徒会その7（後書き）

どうやら、高校から駅まではスクーターに乗っても10分前後かかる様子。そういえば、この高校って寮あるんだっけ？

そして、理科教師の新田智久。国語教師の相沢綾香という新しいキアラが……orz

新田先生の方は一人と結構仲がいい設定なのでまだいいとして、相沢先生は正直名前出すほどのキアラじゃないんだよね。再登場の予定もないし。

あ、最後の一文に意味はないですよ。多分。

<t・会長視点>t; あまりに過激な鬼ごっこ（前書き）

どうも、M r・あいうです。

何かやたらわかりにくい設定ですが、簡単に言うと生徒会メンバーが何の罪もない生徒達を追いかける話です。

というわけで、欲望渦巻く鬼ごっこ編。スタートです。

<t・会長視点>t; あまりに過激な鬼こっこ

絶叫が、名もない山に響いた。

腹部を赤く染めた少年がちに倒れ付すのと、その腹から彼女が手を引き抜くのはほぼ同時。

だが、それも地に倒れ付す少年少女がまた一人増えただけの事。両手を真つ赤に染めた彼女は先ほど狩り終えた獲物に対して何の感慨も見せず、貪欲に次の獲物を探し始めた。

その姿、まるで鬼神。

「みいいゝつけたあゝ……………」

やがて、その双眸が次の獲物を映し出す。

殺し屋の笑顔を浮かべた彼女は獣の如く地面を蹴り上げ、一瞬で間合いを詰める。

その哀れな獲物は、自分の最後の瞬間までその忍び寄る影に気づく事が出来なかった。

そして、気づいたときには自分の腹は赤く染まり、もう戦える状況ではなくなっていた。

そんな状況の中彼は、自分を狩った狩人に最後の言葉を残す。

「なあ、なんでだよ会長さん……………、生徒の為の生徒会じゃ、なかったのかよ……………」

しかし、会長と呼ばれたその狩人はただ単調に、その惨劇の理由を語る。

それは、彼にとって到底納得できる理由ではなかったのだが。

「ん？暑かったからだよ」

そういうと、また次の獲物を探し始める。

その両手から、赤い液体を滴らせながら……………

うだるような暑さにもようやく慣れてきたかいやっぱ暑いわという7月の中ごろ。

今日も太陽は飽きずに健全な現代っ子である桜町第一高校の生徒達の不快指数を上げまくる。

しかし、マンモス校である桜町第一高校全校生徒総勢1027名が

一つの所へ集まっでいて、しかもその全員が真っ白な服を着ている
とというのは、それだけで絵になった。

ここは桜町第一高校がちよくちよく遠足などでお世話になっている
さほど遠くない小さな山の広場。

正確には山と言うほどの高さもなく、決められた名前さえないよう
な小さな丘のようなものだだったが、その山は高校生の微妙なネーミ
ングセンスによって『なんがたがたるいNHK山』と呼ばれていた。

ようは、高校生になってまで遠足も山もかったるい。ということな
のだが。

しかし、今日の彼らは何処か希望に満ち溢れた顔をしていた。

そして、彼らが注目しているのは、一人の少女。

高校一年生ながらすでに全校生徒全員が顔と名前と性格を知ってい
るという超有名人。

桜町第一高校生徒会会長、釘宮 蓮その人だった。

「クラス対抗、学年対抗、部活対抗鬼ごっこだよ！」

と、教頭先生のいつもの天気から始まり教訓に終わるワンパターン
挨拶と、学校名物校長先生の今日の名言（ちなみに今日は『人生の
意味を考える高校生とか寒いわ！知った気になるな若造が！』だっ
た）の後に時間をもらった私は意気揚々とそう告げる。

と、同時にあちこちから歓声が上がる。

うん、うちの生徒会の会議もこうあって欲しいものだ。

しばしの憂鬱に浸ってから再び演説を開始する。

「ルールとチーム分けは昨日の全校集会で話した通りだよ！簡単に言えばくじで引いてもらった半数の人が鬼、それ以外が逃げる人ね！鬼は両手を黒いペンキで塗って、そのペンキが配った白い服についてしまったらアウト！捕まえた鬼と捕まった人はここに来て手続きね。範囲はこの山全体だよ。んで、約束どおり最終的に鬼じゃなかった人間が所属している部活の部費と、クラスや学年の為の文化祭の予算はアップするので、来るべき文化祭の準備とか自分の快適な学園生活のために頑張ってね」

ウオオオオと、歓声がさらにヒートアップする。

うん、これこそ演説の醍醐味。生徒会のメンバーにも見習って欲しいものだ。

そして、最後に小さく付け加える。

「で、私達生徒会メンバーと先生は『ジョーカー』として参加するよ」赤いペンキの私達に捕まったら即脱落、当然予算の権利も剥奪！でもまあおまけみたいな先生も参加した〜いと言う事で出来たルールみたいなものだから気にしないで。というわけで頑張って私達からも逃げてね、それでは皆さん。リアル鬼ごっこ始まりました〜！」

その何処かで聞いたような掛け声と共に逃げる人達が一斉に四方へ散る。

鬼の行動開始は五分後。私達ジョーカーの行動開始はそのさらに五分後だ。

やがて、鬼のくじを引いた不幸な少年少女達が、黒い速乾性ゼロのまるで乾かないペンキを手にとつけると普段の授業を聞く三倍の真剣さで飛び出していく。

残ったのが先生達と私達生徒会メンバーだけになったところで私達ジョーカーの作戦会議の始まりだ。

「さて、俺達生徒会にとつてはこの『ジョーカーシステム』こそが最大の目的だ、説明してみろ、ポチ」

いつもより数倍真面目な二宮先生が鈴木君、いやコードネームポチに質問する。

もうポチに散々突っ込んだ後の鈴木君は何も言わずにおとなしく質問に答える。

「はい、これは予算アップの行事などではなく、このジョーカーシステムを使い生徒からなるべく不平不満が出ないように予算を削る学校の経営をかけた一大プロジェクトなのであります」

「そうだ！釘宮がそうやって教頭を説得したからこそこの行事があると言っていい。そして、このプログラムにおける我々の報酬とはなんだ！ツンデレ、ツンデレ！ツンデレエ！……………天然」

ツンデレこと楠木さんは最後まで無視。

先生も諦めて天然こと涼太に話を振った。

「え？おれっすか？……………えーと、生徒会室の扉が直りそして待望のエアコンがきます。そして先生方には特別ボーナス」

「そうだ！正直俺は特別ボーナスが欲しい！その為には君達の力が必要なんだ！見る！」

そうして、先生は指で他の先生方を指した。

理科の新田智久先生が前髪を気にしており、あいざわあやか国語の相沢綾香先生は

なんかお茶を他の先生方に勧めてる。

そのほかの先生は、スクワットをして筋肉を鍛えていたり、タバコを吸っていたり、立ったまま寝ていたり色々だ。

「見たか！そしてどう思ったハンサム！」

ハンサムこと真崎君はいつものスマイルで答える。

「体育の番先生^{はん}以外は頼りにならなさそうですね」

「そうだろう！だからこそ、君達には全力で事に当たってもらいたいのだ、トランシーバーは持ったか、よし。メガネ、号令！」

なんか先生のキャラまで変わってしまったている。

仕方がないからメガネこと私は号令をかけた。

「うん、じゃあ生徒会。全力で駆けずりまわろー！」

その掛け声と同時に鬼が行ってしまってから五分が過ぎた。

赤いペンキで両手を濡らし、各人それぞれの場所に散って行った。

そして、冒頭。

「アハハハハハハ！」

高らかに笑いながら生徒達の白服を次々赤く染めていく彼女。

犠牲者、およそ50人。

開始10分、そのワンサイドゲームは、まだ始まったばかりだった

.....

<・会長視点> ; あまりに過激な鬼ごっこ（後書き）

次は十六夜 神月さん。のはずでしたが残念な事に私情で途中退席
と言う事になってしまいました。

と言うわけで次は役役を快く引き受けてくれた汐嵐さん。
よろしくお願いします。

<副会長視点>：あまりに過激な鬼ごっこその2（前書き）

こんにちは。十六夜先生の足元にも及ばない汐嵐です。

今回は副会長視点と言うことで、キャラを崩さないためにも、十六夜先生の文体を模倣しました！てか、したつもり…？

ですが面白さの欠片もないかもしれません。

では、あまりに過激な鬼ごっこ、副会長視点。どうぞご覧下さい。

<・副会長視点>：あまりに過激な鬼ごっこその2

さてと、全力で駆けずり回ろう宣言で解散したわけなのですが。会長の狂った笑いから始まり、椿くんが「石毛エエエエ！」と走り出したのを尻目にちよつとした間が出来てしまいました。

「…何でいけないんだよ、真崎に楠木は。」

「だって面倒くさいもの。」

「そう言う鈴木くんこそ行ったらどうです？」

「何だよその俺達はいかないから俺達分の働きしてこいみたいな！興味ないからって言っただけでかっこつけてる中2病よりタチわりーよ！マジで興味ないだろお前ら！」

うめく鈴木くん。息切れをしているのによくもまあ元気が良いこと
で。

「興味がない訳じゃないわ。本当なら風馬を取っ捕まえにいきいたいところなんだけど…。」

「日吉風馬なら鬼ですよ？」

「そうなの、それでやる気なくしちゃって…。」

落胆の印に1つため息。本当に残念そうですね。一回その方にあつてみたいものです。

「おーい鈴木に楠木イ、そして真崎ー。」

向こうから不意に声が聞こえた気がしますが、この声の主は確か、

「ああ、野明君。」

「よっ」

片手をあげて笑う椿くん顔負けの美男子は野明。剣道部の部長、兼僕の親友とも呼べる方でもある。

「主将どこ行つたかわかる？」

「何の事だ？」

鈴木くんは頭の中で悶々と彼の言う主将の意味を考えている。しばらくして野明君が言った。

「涼太のこと。」

「ああ、石毛くんを追いかけにきましたよ。」

僕がそう言つと、野明君はひきつった笑顔。やっぱりとも言いたそうである。

「…椿君はもう少し、自分の立場を弁えなければならぬようです
ね。」

「何イ、知ってんの？真崎も汚れたなあ。」

「良いんじゃないの、涼太だし。」

横で楠木さんが1つため息。鈴木くんにはわからないようだ。
あの事を楠木さんが知っていたとは驚きですね。

「な、な、何だよ？何の話なんだよ？」

「これからも正常で居なければ知らない方が良いでしょうね。」

「またかつ、またなのかつ！」

鈴木くんが喚く。一応ああいう領域…剣道部マネージャーを取り巻く腐女子達の石毛×椿のBL疑惑…を知らない彼には何も言わないでおきましょう。

「で、何です？野明君。」

「ああ、ジュースの差し入れをしようと思ってさ。主将には頑張ってもらわないといけないし。まっ、お前らも頑張れよっ」

野明君はジュース片手にそう言うと、じゃあな、何て言って去っていった。

…鈴木くんはその後ろ姿を一瞬ポカンと見た後、振り返った。
何でしょうか？

「…なあ、あいつって、白い服…全然汚れてない白い服…着てたよな？」

…そして、間。限りなく重い静まり返った間。

鈴木くんは不意に走り出した。

「野明イイ！テメ、ぶっ殺す！」

野明君が僕達をからかっていたのに気づいた鈴木くんは、そんな叫び声をあげて去っていった。

僕も気づきませんでした。彼はどうも読めない方なんですよね。残された楠木さんは一言。

「ねえ、蒼空。涼太が入学したのは何故？」

すつとんきょうな発言に首をかしげる。

楠木さんの言い分はつまり、剣道部とバスケット部がひいきされていると言うことだ。確かにここ、桜町第一高校は剣道とバスケの名門でもある。その証拠に、剣道部だけに差し入れが出たり、バスケット部には体育館ですら冷房がきいたりする。確か…、

「椿君は剣道部の特待生でしたね。」

それを聞いた楠木さんのバックには、冷涼な虎の姿。雪を纏う銀が素敵ですね。

「蒼空…。」

バスケット部と剣道部、潰しにいくわよ。」

こうして楠木さんの“椿君フルボッコ計画”が施行しましたとさ。

&1t・副会長視点> ; あまりに過激な鬼ごっこその2（後書き）

とりあえず謝っておきまーす!……ごめんなさい。

何か…真崎くんのターンに涼太をだしすぎた（泣）反省してます。

ごめんなさいい（泣）

では、お次の時計堂先生。謝罪の意を表しつつお願い致します…。

< 鈴木書記視点 > あまりに過激な鬼ごっこその3（前書き）

テスト目前なのに、せっせと部屋の片づけ。そんな時計堂です。
無駄にサバイバルな話にたくて、暴れさせました。

反省はしています。後悔は……どうだろう。

< 鈴木書記視点 > あまりに過激な鬼ごっこその3

野明の奴、ちよろちよると逃げ回りやがって！

空気が肌にべつとりと張り付いているような湿気の中、やわらかい土を蹴りあげて木々の間を走る。頬を擦ってはすれ違う深緑の葉が猛烈に鬱陶しく、目の前で飄々と揺れている白い服の端がさらに癢にさわった。

百円シヨップから大量輸入した白Ｔシャツも、バックで爽やかな風（ミント配合）が吹いてますよと言わんばかりの美男子ならバツチリ似合ってしまったている。つーか体育会系のイケメンなんて死んでしまえ。真崎みたいなレベルだとまだ諦めがつくが、中途半端に一般人に近いと余計に嫌だ。いや、だからと言って顔がいいってことには変わらないんだけどね！

まあ、つまり言いたいのはだな、こいつの全身を赤で（ペンキである）汚してやらんと気がすまんという話だ。決して嫉妬などではないぞ。断じて。

「鈴木いー。そろそろ諦めたらどうだあ？」

「はっはー。だ、れ、が、あ、き、ら、め、る、か、よっ！」

より一層強く地面を蹴る。べとべとの赤い液体を振り上げておっかけていると、ゾンビになったような気がしなくてもない。そんな気分とは対照的に、挑発的な発言によって足に力がこもるのも事実だった。

しかし、力がこもっても体力が残り少ないことには変わらない。足に地球の重力が作用し始めているし、息も荒くなりつつある。そのくせ野明との距離は一向に縮まらない。

……こいつ、わざわざ届きそうで届かない距離を保って走ってやがるな。

大きく舌打ちしても、状況は変わらず。相変わらず筋肉の筋が悲鳴を上げている。最近運動をしていなかったから、なおさらのこと

だ。

ここは諦めて、他の獲物を狙うか……と、われながら殊勝な心かけをした直後。実に楽しそうに、木々の間から低い声が響いてきた。「おまえ、主将の仲間の割には大したことねえなあ！ そんなじやツツコミ役は務まらねえぞ！」

……………。キレた。

足もとで小枝がボキリという音を立てたのを最後に、地球からさようなら。風を切つての跳躍。久しぶりの感覚に、心臓が全身で脈打った。

木々のざわめく音も、蝉の鬱陶しい鳴き声も、全部切り捨ててのジャンプは約二メートルほどだっただろうか。視界の真下に目がくらむほどの白を捉え、まっすぐに急降下。気配を感じたのか振り向いた野明に向かって、一笑。

残念だったな、野明。余計な口さえ叩かなければ、勝てたかもしれないのに。

俺は、能力を過小評価されるのが何より嫌いなんだよ。

激しい木々のぞよめきの後、俺の下には顔面から地面にキツスを果たした男の姿があった。にやりと唇の端を吊り上げて、笑う。

「おまえ、桜丘町在住のくせに鈴木太郎の名前知らないだなんて、平和な人生だったな」

「なっ、何者だよおまえ……」

頬が擦り切れてもやっぱり男前。俺は嫌がらせっぽく頬に粘着質な赤（言うまでもなくペンキ）を塗りつけてやる。先ほどの揺れで飛び去ってしまったらしく、蝉の声は聞こえない。

さて、どう名乗ったものだろう。考察して、思考して、苦悩してみた。しばらくして、出てきた結論は一つ。

「……普通の高校生かな」

足をどけて、土を払って立ち上がる。噴き出した汗が急速に冷え

て、ほてった体を冷やしてくれる。それがたまらなく心地よくて、息を吸い込んだ。振り向きざまに足元を見下ろし、にやりと笑う。

「それじゃあな。イケメソこと野明」

逆恨みは果たした。もうおまえに用はない。幸あれ。

紅に染まった野明を（誰が何と言おうとペンキ）置いて一歩踏み出す。どこかでまた、被害者の断末魔が響き渡る。やってるやつてると、小さくほくそ笑んだ。

木々の間を一陣の風が吹き抜け、潮の香りをここまで運んでくる。夏あたりは海での活動を言い渡されそうだな、という確信めいた予感という予感を伴って。

俺の名前は鈴木太郎。

かつて街を騒がせ、県下最強と謳われた喧嘩最強のヤンキーである。

「……………うぎゃ」

数歩進んだところで、膝を地面に着く。悲鳴にもならない声を上げて、腕もついた。

いつ……………てえ。

久しぶりだったせいだろうか。腰と太ももの尋常でない痛みが筋肉とか骨とか肉体を震わせて、ご丁寧に脳まで運んでくださった。そんな交通網整備してなくていいよ肉体。かつこつけた後だから余計に痛い。どんな意味かは皆さんのご想像にお任せしよう。

「あー……………だつせ」

ため息と、ため息。つーか呼吸。力を抜いて、泥も構わず地面にダイブした。砂利とかが頬の皮を削るけど、もーそんなのどうでもいい。

我、地に伏せたり。あとは任せたぜ。

コードネームポチ。戦闘不能による脱落。

< 鈴木書記視点 > あまりに過激な鬼ごっこその3（後書き）

あまりにししやり出ってしまったので、脱落させてみました。

普段運動してない人が縄跳びとかすると、動けなくなるよね（経験者）。

本の虫のくせに、なんで突然縄跳びを引っ張り出してしまったんだろう……。

お次は椎名さん。よろしくお願いします。

<・書記視点> ; あまりに過激な鬼ごっこその4（前書き）

こんにちは。

文才ゼロの椎名です。

またも滅茶苦茶な文になってしまいましたが、どうぞ暖かい目で見守りください。

大体何でこのあたしが、会長の御戯れに付き合ってこの炎天下走り回らなくちゃいけないの？

こういう熱血ごとは、あたしの専門外。

御熱いお馬鹿さんだけで勝手にやって頂戴。

そう思っていたのは、つい数分前のこと。

現在あたしは、幼馴染兼道場仲間の風馬のために走っている。

隣に、副会長こと蒼空を連れて。

「理不尽に決まっているわ。あたしのいる生徒会室がエアコン禁止で、チビ風馬のいるバスケット部は体育館でもエアコンオツケーだなんて、有り得ない。一発殴って差し上げないと」

「楠木さん、彼は鬼のはずですが？」

苦笑しつつ、蒼空が言った。

その言葉を、あたしは鼻で笑う。

「そんな関係ないわ。とにかくあたしは風馬を殴り飛ばして、それからバスケット部を潰すの」

「いつもながら物騒なこと言わないで下さい」

「だって、納得いかないでしょう？あのチビが優遇されているなん

・・

人差し指を立てて抗議を始めた瞬間、前方で砂煙が上がり、聞き覚えのある声がした。

「姐さっっん！ー！！」

「おや」

蒼空が小さく呟く。

眉間に皺がよつていくのが、自分でもはっきり分かった。

確かに、殴ってやりたいと言った。

それは認めます。

でも、でもさあ。

「こんなに早く来ること無いじゃない・・・」

「はいっ？何がですか？姐さん」

気がつけば、ヤツはきらきらしたつぶらな瞳をこちらに向け、首を傾げていた。

その姿、まるで子犬のよう。

明るい茶色の髪は地毛であって、染めたわけではないと依然言われたことがある。

「って、あああ！貴方は！」

チワワアイを、今度は蒼空に向けると、風馬はきんとした声をあげた。

さすがに、蒼空も笑顔を強張らせている。

しかし、そんなことは気にも留めずに、風馬は続けた。

「副会長の蒼空さんですよ？」

「ああ、はい」

曖昧な顔をしたまま、蒼空は肯定する。

「やっぱり！うわあ、うわあ！やっぱり近くで見るとすごいカッコいいですね！！三年の間でも有名なんですよ。インテリ美少年副会長って」

チワワアイが威力を増す。

「はあ、それはどうも・・・」

「姐さんを含めて、今年の生徒会メンバーはスター軍団だって言われてるんですよ！破天荒だけど美人な会長さんを筆頭に、インテリ美少年副会長さん、眼帯がチャームポイントな会計さん、登山部のワイルドな・・・あれ役職なんでしたっけ？まあいいです、それに無気力だけど何故かそこそこ人気な二宮先生！そして、ツンデレゴスロリな美少女書記こと、姐さんっ！！！」

くうつと、拳を握り締めて力説する風馬。

ねえ、犬を忘れてるんだけど・・・？

「あああ、俺も三年じゃなかったら、立候補したかったんですよ・・・」

「それは良かった。あんたなんかと生徒会にいたくないわ」

「また姐さんはそんなこと言うっつ」

「にしても、貴方はバスケット部のエースと聞きましたが？」

涙目になってきた風馬をなだめるように、蒼空が話題を変えた。
にこりと涼しげな微笑がなんとなく憎いわ。

蒼空の質問に、一瞬風馬は黙り込む。

「あー。やっぱり見えませんよねー、こんなチビがバスケットなんて」
「風馬・・・」

「そんなことはありませんよ？」

自分の頭を押さえて苦笑いする風馬に、蒼空は躊躇い無く言った。
それは、慰めとか気遣いとか、そういうものが一切見えない、心からの言葉。

「むしろ、すごいと思いますけどね。その背でエースの座を勝ち取るのは、大変だったでしょう？並々ならぬ努力と、強い志。両方を持っていないと、エースなんてなれませんよ」

「副会長さん・・・」

「大学はスポーツ推薦だそうですね。頑張ってください」
うるり、と風馬の目が潤む。

「うっうっ！そう言ってくれたのは、姐さん以外で初めてですよっ！」

「そ、そうなんですか」

風馬の気迫に、蒼空はちょっとだけ後ずさりした。

確かに、涙でぐしゅぐしゅの風馬は少し怖い。

そもそも、ペンキべつたりのその手を近づけないで欲しい。

「副会長さんだったら、安心です！」

「は？何、突然・・・」

涙ながらも、につこと笑って言った風馬を、怪訝な目で見る。
その視線に気づいているのかいないのか。

風馬は、ちらりとあたしを見た後、蒼空に手招きをした。
どうやら内緒話らしい。

かなり腹は立つけど、まあ盗み聞きするほどあたしは下世話な奴じゃない。

「蒼空。あたし、バスケット部を捕まえに言って来るから、話し終わったら来なさい」

「了解です」

清々しい二つの笑顔に見送られて、あたしはまた走り出した。

「それで、何の話が？」

「ああ、はい。姐さんは見ての通り人をあまり寄せ付けない方なんですよ」

「まあ、そんな感じですね」

「だから。だから、姐さんの傍にいてあげて欲しいんです。姐さんは、人を嫌うけど、一人になることを何よりも嫌っていますから」

「・・・？」

「姐さんの過去は、俺が言うことではないんで、姐さんに直接聞いて下さい。俺からお願いは、姐さんを嫌いにならないでほしい、それだけです。勿論、生徒会の皆さんにもお願いして回りたいんですけど、それは少し面倒なので、副会長さんに代表でお願いしておきます。姐さんの、友人になってあげて下さい。姐さんが、もう独りぼっちで泣くようなことが無いように・・・」

<・書記視点> ; あまりに過激な鬼ごっこその4（後書き）

うわぁ。

見事に都古と蒼空と風馬しか出てません・・・。

もう、でしゃばりすぎて、すみません！

そして、汐嵐さんよろしく願いします！

<会計視点>：あまりに過激な鬼ごっこその5（前書き）

まわってくるのが早かった（笑）汐嵐です。

えー、今度は真崎君視点（妄想）が少し入ってますが汐嵐はカッコいい真崎君が大好きです。

まあ気持ち悪いで切り捨てていただければOKです。

では、あまりに過激な鬼ごっこ、会計視点。どうぞお楽しみください。

「あ、多分それ僕がお星様になりそうですよにつて願って寝たからだ。」

「お前かアアア！お前なのかア！！」

俺は解散の合図とともに、視界の端に潜んでいた石毛を、一番最初に捕まえた本間を連れて長時間にわたって追いかけてまわしていた。「てか涼ちゃん？！もうぶっ続け一時間も全力疾走してるよねコレ！俺もう死ぬかもしれない！！」

「なめんなよ！俺はあと20分はいけんぞ！！」

「僕もギリギリ後10分はいけるかな。」

「鬼だアアアア！！！！お前ら人間じゃねエエエエ！！！！」

「いゝしつげくゝん……」

振り返りつつ叫びながら、俺の魔の手から逃れる石毛の目の前から狂気に満ちた凜とした声が聞こえた。

刹那、石毛の断末魔が山の中に響いた。

「蓮うゝ……俺の獲物だったのにイ……！」

「あはは、ごめん」

蓮が心底楽しそうに、満足そうに笑った。俺はふっと怒る気が失せる。くっそー反則やろーめ。幼い頃から蓮の笑顔に俺は弱い。

ふと見ると蓮の後ろには、もろ赤いＴシャツを着た大空先輩が居た。

「大空先輩は何で……」

「さつき会長さんに捕まっちゃまって。みんな捕まえるのを手伝ってって言われてな。」

何をだよ。

心の中でそう思った後、石毛が足元で悶絶しているのを見つけた。「やば……俺……死ぬかもしれない……」

「くっそー。死ぬよ石毛ー。マジ死ぬよ石毛ー。」

「本間アアアアアアア！！！！涼ちゃんが反抗期イイイイ！！」

「お星様よー俺は死んでも良いからこいつを殺してくれー。」

さらりと言い放つと、石毛は泣き声になって本間にすぎる。はっ、ざまあみろ。

と、ザッザ、と言う魔王降臨のような足音が聞こえた。ふと前を見ると、

「……ええー……」

もうすでにそれは白の要素もないのではないかと思うくらい赤いTシャツを着た軍隊（筋肉質の運動部の男子達の事だ）を引き連れた都古がこちらに近づいてきたのだ。

「クソ眼帯に一年石毛。剣道部とバスケット部の最後の生き残りとしてあんた達を捕まえる。……大人しくなさい？」

……氷の笑みを浮かべ、そこら辺に落ちていた木の棒を構えている。「……え、何……？これ。俺仲間だよな？ジョーカーだよな？何があった。俺なんか悪いことした？！石毛はともかく！」

「涼ちゃんンンンンンン？！何で俺は恨み買っても仕方ないような感じになっちゃってんの？！」

「状況が理解できないようね。……もうこれは、クラス対抗でも学年対抗でも部活対抗でもない！不当なひいきをされる特待生にたいする生徒たちの逆襲となったのよ！」

つまり！！生徒達vs特待生の、最終決戦にね！！」

都古がそう言い放ったが早いか、俺たちは軍隊的な筋肉質な生徒達に囲まれた。

つかこつちの方が不当な決戦だろオがアアアアアア！！！！

「やべーよこれ……。捕まったら油揚げにされちまうのかア？どうしよ、昨日お星様に俺の命の安否も願っておけばよかった……」

俺はそう冷や汗をかきながら、さりげなく蓮の手首をつかむ。

「オイオイ冗談きついよオネーサン。俺デレの無いツンデレは好物だけどね、残念ながらMっ気は無いの。」

石毛も状況を理解し、本間に相槌を打ってから大空先輩の手首をつかんだ。

「油揚げにされてたまるかアアアアアア！！！！」

途端、俺と石毛は同時にそう言い放ち、五人でいっぺんに走り出した。

「涼太っ、これは何?!何がもらえるの?!」

「おめーの好きな菓子おごってもらう券だ!もちろん石毛の金で!」

「何で俺エエエ?」

「僕新しいスパイクお願い!」

「あ、じゃあ俺はバンドナ三枚な!」

「石毛エ、俺竹刀な。もちろん新しいの。」

「待て待て待て待て、皆はともかく何で涼ちゃんがお願いしてんのオ?」

走りながらも俺たちはそんな会話を繰り返す。

そして――、最終決戦が始まってしまったのだ。

<・会計視点> ; あまりに過激な鬼ごっこその5（後書き）

石毛と本間が復活！！…ですが石毛のキャラ、今考えたら濃いですね。ごめんなさい。出張りました。

BL疑惑の真相がわかったと思いますww（↑おい

では、こんなキラーパスで暴走しましたが、無限の闇先生、お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6078i/>

生徒会へ集合っ！

2010年10月9日19時58分発行